滑稽雜談

辰下。

特別
へ5
6326
6

~5
6326
b

滑稽雜談卷之六目錄

三月部下

初 爐塞 同 鞦韆戲
二 茶試 嗅茶 三 衣紙
同 麥鶉 五 小鮑 多食除
六 麻角解 七 蠶 菜子
十 鶉 梢うづら 十一 慈鳥
十三 さゝ眞 十四 花 もゝ鶉 もの蕊
もの皃 もの心 十五 八重櫻
十六 櫻粥 さくらがゆ 十七 櫻戸
同 杏の花 廿 梨の花
同 楸の花 同 小梅の花
廿五 藤 棚の花 同 木瓜の花
同 胡桃の花 同 榠樝の花
同 拔河戲 同 工奥梁
同 喚子鳥 四 杜鵑の巢
同 雲雀入鳥 同 鳥うづら
同 鴈 鳥 同 鶺 柳鳥奥
同 桐朝 十二 鳥鼓奥
十三 もゝ軍 花の形 もの皃
もの戰 樺さくら 大さくら
十四 庭櫻
十五 桃の花
廿六 海棠
廿七 李の花
廿八 林禽の花
廿九 木蘭の花
三十 楊梅の花
三一 木瓜の花
三二 躑躅

D101861387770

廿 沉丁花
同 新葉橘
廿一 早蕨
同 菫
同 あけびの花
同 馬蘭
同 金鳳花
同 芫荽
同 芳蒜
同 二葉芹
廿二 紗掛の茶
同 茶橘
同 狗脊
同 藤
同 桜草 七重花 九輪草
同 えんご
廿三 華鬘
同 酢漿草
同 蓑笠の竹
同 加木
廿四 冬法
同 茅花
同 楊麻
同 冊子草
同 眉作の花 雷金盞花
廿五 春菊 多葉菊
同 丁子草 雪仙雪萩
廿六 菊柏 菊の同名なるもの
廿九 二月大根 二月菜
同 杓杞
廿六 山吹
同 虎杖
同 冊子草

○爐塞

爐冶也○白氏文集曰別春炉。煖閣春初入。溫炉與梢闌。晩風猶冷在。夜火且留看。独宿相依久。多情欲別難。誰能共天詔長遣四時寒○七十二候集曰春分之末候雷乃発聲。清明之初候桐始華。穀雨之初候田鼠化為鴽。立夏之初候蚯蚓出。小満之末候苦菜秀。芒種之末候螳螂生。夏至之初候鹿角解。小暑之末候蟋蟀居壁。大暑之初候鷹乃学習。立秋之初候涼風至。処暑之末候鴻雁来。白露之初候玄鳥帰。秋分之末候雷乃収声。寒露之初候蟄虫坏戸。霜降之初候豺乃祭獣。立冬之初候水始氷。小雪之末候虹蔵不見。大雪之初候熊羆入穴。冬至之初候蚯蚓結。小寒之末候雁北郷。大寒之初候鶏始乳。此外乃未編入之月令未詳所載。

○説文曰方鑪也○廣韻云火牀又爐冶也○白氏文集曰別春炉。煖閣云火達又曰炉晩風猶冷在。夜火且留看。独宿相依久。多情欲別難。誰能共天詔長遣四時寒○七十二候集曰春分之末候雷乃発聲。清明之初候桐始華。穀雨之初候田鼠化為鴽。立夏之初候蚯蚓出。小満之末候苦菜秀。芒種之末候螳螂生。夏至之初候鹿角解。小暑之末候蟋蟀居壁。大暑之初候鷹乃学習。立秋之初候涼風至。処暑之末候鴻雁来。白露之初候玄鳥帰。秋分之末候雷乃収声。寒露之初候蟄虫坏戸。霜降之初候豺乃祭獣。立冬之初候水始氷。小雪之末候虹蔵不見。大雪之初候熊羆入穴。冬至之初候蚯蚓結。小寒之末候雁北郷。大寒之初候鶏始乳。此外乃未編入之月令未詳所載。

○鞦韆戯

漢武帝後庭之戯本云千秋祝壽詞也後為与秋千○古今藝術曰秋千北方山戎之戯以習軽趫也○荊楚歳時記云春節懸長縄於高木士女衣服坐立其上推引之名

日秋千楚俗謂之施鉤洹槃経謂之習索然考之字音則
曰秋千縄戯也今其字従革安未詳用革王延壽作千秋
賦正謂此戯（己上法）○開元遺事曰唐宮寒食節立鞦韆与
楽呼与半仙戯○王建詩云長長絲縄紫復碧嫋々横枝
高百尺少年兒女重（下畧）秋千盤巾結帯垂両邊勻軽裙薄易
生力雙手向空如鳥翼○順倭名曰秋迁（和名由以縷佐波利）
縄懸空中以与戯也　これくれ
胥索云々魚て梨の小兒の戯云々ぬくその之なまる戯乃二字おの次
云ふ説亦さうもあれど血氣浅部略
○按河戯　○五雑俎曰唐時清明有按河之戯
其法以大麻経両頭各繫十餘小索数人執之対挽以強
弱与勝負云○曼々和まあ有り乃戯之云月よ堂の事文安抓の按之
○上（ヘ）魚梁　○日本紀（巻三）曰神武天皇戊午年春
天皇至吉野抜磐石而出者（アリ）天皇問之曰汝何人對曰臣（ヤツコ）
是磐排別之子此則吉野国操部始祖也及緣水西行亦
作（ヤヽ）梁取（トラ）魚者（アリ）天皇聞（キコ）之對曰臣是苞苴（ツト）擣之子此則阿太
養鸕鷀部始祖也○詩谷風曰毋逝（ユク）我梁毋發（ハナツ）我笱（ウヱ）○礼記
王制篇曰獺祭魚然後虞人入沢梁○朱注曰梁絶水取
魚者周礼註云水堰也堰水与閘空以笱羙其空○歐陽
詢初学記曰魚笱曰箔○字彙曰箔取魚
具晉時銭塘百人作箔（ヘ）取（トル）魚億計○楊升菴云箔字従洪
石梁絶水曰洪射洪呂梁洪是也洪加（ヲ）竹与箔蓋以竹与
奥梁○順和名曰奥梁（和名夜奈）○はた文月に受もしと云ま
つりて河水まさのり魚を取るまも今とのり梁して称なりし海上
よりせぬる之湖水なるに何ぞ河之一説ふ云ふ魚梁ら云魚梁ら云秋の異別
なし云ふ通ふ云歌よりもあり
新六　せきかる田上川のうち薬まを風く水の底をわくる如
○御幸日のうち薬まを之ふ歌れのうち薬之　○異説識ふ改ふ

（丈補）良安曰今奥梁多以竹簀立于左右工溜下狹而空口
別曲簿如簾無底編纏若底兼奥梁之空口者即筒也奥
隨流入又以簀如扉而奥入則順而無障出則迷而不得
出去（俗曰加此箇之新製者予字景曰奥梁堰石障而空
其中以通奥往來者筒者曲竹兼梁之空以取奥者

○茶茗 并嚫茶

音途詩云誰謂荼苦其甘如薺者是也○茶錄云竜焙泉
即御泉也北苑造貢茶社前茅細如針用御水研造每片
計工直錢四万分試其色如乳乃最精者○二条按此茶記
云采下茁之芽以賞翫也云々然則今之抹茶園之下種
上人とやらん茶の種伝授抔云々傳未詳○海人藻芥云采自上古
在我朝挽茶節會ト云於內裏被行公事後式而奈上傳正入唐之
時重ニ種ノ子渡梅尾明惠上人說之サレハ本ノ茶ト云ハ梅尾ヤリ非
トニハ宇治ノ茗ト云人○雍州府志曰足利將軍義滿公偶在伏見
時夢羽仙傳植茗摘鮮之術始使大內人采植茗於菟道
爾後宇縣石林祝長井氏人製茶至法住寺義澄公特賞
之故命彼等益精選之或桶極或桶工揃或秤別羙揃近
世上林氏人自卅汲工林鄉遷居於此處逐日富榮○凡
宇治の茶都十一家毎〇公方御茶摘の節ハ其儀式ハ
其ことく制しかき壷ニ入封じ禁裏院中公方御所の六名小名又
町人富家の數ヶ所へ相調ニ其ことく茶摘ニ入ル人の五人相調ニ其ことく
ハ茶摘ニ入ル人の名ハ許ニ書ル

○衣類

山吹乃衣 黃花染黃
あり早蕨の衣 表ハ青く裏ハ黃 青山吹 表青く裏黃
古歌ニ 表ハ青く裏ハ青し 裏青萌黃 青山吹 表青く裏黃
古代男ニも女ニも名の有し歟○紺染ハ淺岩ニ徹ル
おもふ人の衣の色名ハ淺くとも二月ニ着ル事ニ許ル

○莫子鳥　○八雲御抄曰莫子鳥ハ雲の如くうつくしくうつる鳥ともいひ又ひくくうつる鳥ともいふ
万葉集の長歌よりおもふに莫子鳥ハ鵠の事なるべし
○拾遺集抄云柿井衆依の仏教法師ありて大宗
乃至万葉集の長歌よりおもふに莫子鳥ハ鵠の事なるべし
○貞徳抄云柿井衆依の仏教法師ありて大宗
よりて歌語の雙紙一帖あり其の中に
猿　多遠のみやこともいふべくぬ
宮　京ともいひ侍集に乃ち
山城の国の都のありそめ
嘗　ためしくはなれる事
郭公　鳥の人とならはしの風俗のおかし　俊成
○野槌云長谷川式部が柿寺尚空上人ハ常に
小莫子鳥ハ人をもとめて猿をとるといふ
曰呼子鳥ハ中おおくの義と誠ふ真中小猿ハ四季に鳴

猪文抄の云中くらいの事の中狩人若同のあるをとりて景と称くたくなりて
あるひはこれ世に小呼子鳥ともいふ安貞よりハ
多くこれを世に呼子鳥ともいふ　○万葉集に猿なくといふ
ハ猿なくにハあらず人我をまねて猿のごとくなくをいふ
入道小弁のありしを呼ぶとて○古今
注にこの事を述給ふこと呼子鳥乃ち
我文をもて批判をもつて事にあたる
志のごとし俗説ハ俗説を用ゐるものなり
人ともに事の為めにハ俗文なきにハあらず
万八　春雑歌　神奈備乃伊波瀬乃杜乃呼子鳥痛莫鳴吾戀益　鏡王女

○杜鵑乃巣　○説文曰杜鵑罔王望帝所化至今
寄巣生子百鳥反哺其雛尚如君臣○穀公詩曰杜鵑飛
飛無定棲結巣養子百鳥依春深花落晝夜啼安得百鳥
挾以飯○時珍本草曰杜鵑不能与巣居他巣生子○和

四少と郭公の巣とを名例まち〳〵分の多乃巣より卵を見ると〳〵

万九　鶯之生卵乃中介霍公鳥獨取生而已父介似而者不鳴己母介似而者不鳴宇能花乃陰有野邊從飛翻來鳴令聞音下畧○歌林良枝云

つまの世よとまち〳〵當の巣より四多の雛ごろ事ありと〳〵

杜鵑窠　良安曰

○晝寢　卵四或五杜鵑卵只二也太補

雅云鶻不木處可謂安寧自如○月令季春之月田鼠化与駕○埤腾躍不過敷仞下翔蓬蒿之間付鶻笑鵬者也鶻候鳥也常晨鳴如雞翹尾収麥行者以与候春秋運斗樞云立春雨水鶻鶻鳴是也鶻與鶉雨物也形狀相似俱黒色但無斑者与鶻今人總名之爾雅云鶻子餵駕子鸇註云鶻鶻同鶉属也駕鵪也禮記云鶉小不可与羹以酒蓼醸之蒸煮食也掇救說則鶉與鵪与兩物形狀彷彿故不知別之則夫鶉也始由蝦蟇海魚所化終卽白鶻也始由鼠化終復与鼠故無斑而夏有冬無焉○孔俗ま云麦鶉とひく麦熟る頃鳴若之其形鶉也斑あり共常勿早く云文早徹ともさる又一名あひ地黄名又秒よりてハほゝと略よ云麦鶉と名ると指陽之ゟ

鷹三百首　小窗部　寛政本不注の麦鶉乃二月に巣ろ当と之

○三百首抄云麦乃落鶉なりと〳〵

○小鶻　窗之百　李部　寛家

○鷹書曰鶻之有赤黒青白黄之五色也　寛家

○鳥屋際　窗之百　李部　足引の小山之つゞらあ〳〵

○鷹書曰鶻之有赤黒青白黄之五色也　寛家

○世二ケ條云の鶻初なり〳〵吟歌して仰ぎなり〳〵

○雲井入鳥　或連ねて書よ曰雲井入鳥と之　頃の事を云

書に鶚と之四ゝ二月空の卵ゟ産も随風多入雲井ゟ化もあれと中古當

世ゝ用ゐ〳〵勾未定と雖ども中古の名卿也ける事ども
くるゝ〳〵雪ふり入ひるまでも ○大石掃ふ事連歌ともよき雪は掃ふ
名雪 二月ゟ 多と落雪ゟ入日の気色にて定しも雪と杉やるめん 古遠洗
○鼻帰 御傘日多のつゐる雪ゟ二月の雪ゟ深
多の古葉ゟ降るゟや只日の雪にて猶〳〵ゟ降る多ゟよの白き雪ゟ
千載 花の根ゟ多ハ古葉ゟ帰ゟ雪のしらゝを知人そなき 宗祇流
雪 如とちる雪とゟぬあとゟふるゟ外 為広伝云 雪云
○大石掃ゟ件の筑のごとくに雪ゟ入多ゟ多の日し紀ゟ修統雪権ゟ降ゟ
と雪ゟ雪ゟと仰候ゟ傍ゟ也

○鹿角解

○抱朴子曰南山多鹿毎一雄遊牝百数至春羸瘦入夏
惟食菖蒲即肥當角解之時其茸甚痛○格物論曰鹿性
多驚烈能別良草他獣多羣十二辰及八卦惟鹿不然麋
冬至角解鹿夏至角解○時珍本草曰鹿角夏至則解按
熊氏礼記疏云鹿是山獣属陽情淫而游山夏至得陰気
解角従陽退之象麋是沢獣属陰情淫而游沢冬至得陽
気而解角従陰退之象○ゟ〳〵ゟの説ゟ連俗古ゟ多ゟ許用し
捨ゟし世名ゟ称ゟるゟもゟ有ゟ〳〵初夏ゟ鹿ゟ毛ゟ赤ゟ冬ゟ
ゟ白ゟ〳〵ゟ故ゟ名ゟ也ゟ〳〵ゟ説ゟ秋ゟ郷ゟ信ゟ

○蠶

兵眉生蠶云又曰又口裹含蠭便得抽絲自此始有養蠶之道焉全文畧之○礼記月令仲春之月蚕事既登分繭稱絲効功○説文曰蚕虫吐絲也○時珍本草曰蚕從朁省象其頭身之形從蚰以其繁也俗作蚕字者非矣蚕音腆蚘蚓之名也蠶病風死其色白自白故曰白殭死而不朽曰殭再養者曰原蚕蠶之屎曰沙皮曰蛻蘘曰繭蛹曰蛾音兒蠶初出曰蚳音苗蠶紙曰連也蠶種類多有大小白鳥斑色之異其蟲屬陽喜燥惡濕食而不飲三眠三起二十七日而老自卵出而与蚳蛻而生者与母同老蓋神虫也南粤有三眠四眠兩生七出八出者其繭有黄白二色亦雜虫樗繭也蚘蠶也棘繭棗繭皆各因所食之葉名而蠆即今桑上野蠶也今之柘蠶与蚕並育即棘繭是也凡諸草木皆有蚍蜉之類食葉吐絲不如蚕絲可以衣被天下故莫得並稱○續齊諧記云吳縣張成見一婦人立宅東南角謂成曰此地是君蚕室我即地神明日正月羊君宜作白粥泛膏干上以祭我必當令君蚕百倍言訖失所在成如其言与作膏粥奁奁大得蚕也○和名生ら志乃統のごく春初よりく蛹ら蛾を七八俗よ蝶と云は紙よ卵ら蚳ら蛾を七八俗よ蝶と云は紙よ卵ら蚳ら蛾ら蝶子と云ちいさき蛾のごく毛虫よりも芽の葉を細よ剋て蚕乃形と成長ら之古書の説のごく蚕座葉柄なとも大抵皆ら名蚕を呼て蛾と稱を接ありて蛾ら字ら訛ありて蚕ら字ら訛ありしも養蚕ら事ら詳ら欽明天皇の御宇ら頃ら事ら如く又赤蛾蚓の數ら和ら云ら山繭とく自然生のちいさきまゆら原蚕ら眠きまゆを易子又二度子と好ら如ら○蚕物語ら云昔小天竺の高仲岡の大王森庚と申す君臣各

望でもつて往母の不存ぜて桑孔木の實熟母と共に海よ
豊浦の濱よりそを拾ひて母と同ふ食ふをもて
を扶持ち神ろくしき皇女死して後蚕の飛し
来るを見ひろひ来のまゝにそよ飼ひ後よ
絡として世よしきと産のわけるとなん又一説云欽明の皇女小姫君薨後
小弘ろく神と祝ひ祀四吉と舊國霖雨大ち女やしばしばろく蚕の糸と
況をとゞ○老ふの況多誠物況をもて

万土　足常乃母之養子乃眉隠隠在妹乎見依鴨　柿本人九

○桑子　○先代舊事紀六日養屋門戸丹西北植一樹
之桑樹下方一歩造籬曳注連老蝶死則以繭餅醴酒祭
之而令死蝶置于幣於桑下籬中不小兒侵蚕子已生而
勿養帯雨之濡葉養婦勿鰐血紅死産忌服勿令忌服者
入家亦鰐之句令沉麝薫脳香中之使家鼠施食而不中
之○捜神記曰上古時百人遠征家惟一女子焉母思父

戯馬曰汝能迎得吾父吾将嫁汝馬乃絶韁去得父還後
馬見女軟怒父怪之女具以告父大怒殺馬曝其皮女至
皮所忽蹙然蒼女而行後於大樹枝得女及皮尽化馬蚕
既死因名其樹曰桑ノ蚕也此蚕桑之始也皇図要紀曰
伏犠化蚕与絲又黄帝四妃西陵氏始養蚕与絲○古語
又蚕ニ乎て糸子と称ちる接ち○蘭陵ろ元禄蚕養の伝ニ云四月神子日午家生女子と蚕婦と称して
蚕室とうき掃ひ祝神之次ニ酉ノ午日始て糸よ分て四ノ月蘭とひく時よ
午日始て糸よ分て四ノ月蘭とひく時よ

万十二　中々二人跡不在者桑子尓毛成益物乎玉之緒計　作者未詳

○太神石日本紀曰雄略天皇六年欽使后妃親桑以勧蠶
事爰命蜾蠃人名聚國内蠶三才口會曰蠶神名天馳泚
南王蠶経曰黄帝元妃西陵氏始蠶至漢祀宛流夫人寓
氏公主号有蠶女馬頭娘此歴代所祭不同以有馬頭娘
之名与馬皮

（蠶之別名）（女入蚕化蠶之說此附會耳）○良安曰今養蠶之地多（但幾州多作草綿不養蠶）其綿加賀越前与寂上但馬丹後次之共潔白与婦人帽子佳也近江飛弾雖不潔白性強故堪与衣服類紡丹波伊勢上野又次之其他不遑記○養蠶法每仲夏取繭收之羊月而繭中蛹化蛾出放蛾於紙則遺卵於紙而蛾死取紙收干櫃至翌年三月桑芽生頃出所藏紙則卵孚成蚊睫似小蚉而微黑色歷羊月則変白色有黒點者初生用桑嫩葉細剉養之稍長者用桑葉扶乾不剉養之將（横）干枚上則与綿（ト）如一繭二蛹者不成綿蠶能趺行而不出於席外亦一異也其處宜要清浄但臭穢之気脳麝之香烟草之烟共忌之寂可與鼠蠶（ト）咬人毒入肉取苧麻汁飲之即解凡以麻子近蠶種則蠶不生（本艸苧麻下見干）蘭（音堅蠶蛻出蛾者曰蘭和名末由）狀似草綿之桃味甘温治癰疽山繭（ト）乃山中蠶自所作繭也取之与絲織者甚強但染而不染也○わかやまの国より蠶つくる一蚕を神より包候よしをけも通つもと

○日本紀

土寅朔甲辰（檀宮北）到火前国松浦縣進食於玉嶋里小河之側於是皇后勾（ト）針与鉤取粒与餌（ト）抽取裳糸与緒（ト）釜河中石上而投鉤祈（ト）之曰朕雖欲（ト）求財国若有応事者河魚飲鉤因以挙竿乃獲細鱗魚収皇后曰希見物也故時人号其處曰梅豆羅国今謂松浦訛焉是以其国女人每

當四月上旬以鈎投河中捕年魚於今不絶唯男夫雖鈎
以不能獲魚○雀鹵鍚食経曰鮎貌似鱒而小有白皮無
鱗春生夏長秋衰冬死故名年魚也○順和名曰鮎和名
安由楊子漢語抄云銀口魚又云細鱗魚○古れらの説鮎を
あゆと訓も形と生衰も雀鹵か説相あへり時珍本艸を見れは鮎は鯰に當れり
こゝにて鯷魚之あゆの説あり多識篇には鰷をあゆと訓せしはいつれか是なるや
夏長きなと云ふにより夏之小鮎扱鮎而鮎は春之比志者
すして氷魚と称すれはものゝ鮎も春之秋にいたりて奥へ裏へ白波に赤
色と生たる錆鮎と称を淵をさひし用ひし又秋は氷に随ひて落鮎なる
くるしき秋之名ふまて出る絶てすし於ては都に流せり

万五
わかゆるまつらの川の川波のなみにしもはわか恋めや 和可由都流 母波姿 松浦姫

夫木
隅山川のみる小鮎のそれならはかくもにこる世にまれけん 知家

○鯈（ハヘ） 柳葉魚

○時珍本草曰鯈魚鯈條也其形也生江湖中小魚也長僅数寸形狭而扁状如柳葉鱗細而整潔
白可愛性好群游荀子曰鯈浮陽之魚也最宜鮓菹○四
声字苑云鯈魚似鮎而白色也○順和名曰鯈漢語抄云波
江又用鰷字所出未詳 時珍か鯈の説もあゆに似たる和俗わた
多識篇にはあゆとよみ鯈を鮠と呼く柳葉魚とし又柳まてと 按あるに鯈
は細鱗あれはあゆの無鱗に遠き故に或師は鯈をはえとし以て荀子のふ
鯈は何由にて叶ひ何識篇にも字は鯈也用ゆへし

夫木
冬川の岸のあたり水あさみえあまり世にもあらむまゝに 衣笠内大臣

○大谷神
大和本草曰鰻何の川にもあり数あり白き魚なるをあかき魚の便もあり
之荀子の倭俗鰻の字とあてしかも万葉集にも出て未詳 順和名抄には鯇を
あてし訓を先も亦出て未詳図俗の訓は古葉にあるもと

○良安曰鰷未詳
俗字鰷処々河湖中多状似鯈而白色背淡黒略帯青色
性好群集浮游于水上味甘淡稍美而不腥然不及鯈之
美也性嗜蠅故漁人用馬尾或鯨鬚摸成蠅頭先泛炒糠
于水上則群鰷聚於時投蠅頭于水頻々鈎之手熟者一

䑋数百或以網亦取之春夏多出其大二三寸其行水中
至速也故名波衣 波夜志訓下略相通也
○鱒 桜うを ○詩曰九罭之魚鱒魴 ○朱子注曰鱒似
鯶而鱗細眼赤 ○順和名云七巻食経云鱒一名赤魚和
名萬須 ○時珍本草曰説文云鱒鯫赤目魚也孫炎云鱒
好獨行尊而必者之故字従尊従必状似鯶而小赤脉貫瞳
身圓而長鱗細于鯶青質赤章好食螺蚌善于遁網 ○老
和文云由も人正月乃節会に奏する腹赤の贄も此鱒の魚なり又一種俗に
川鱒と称する鱒を云老之其形鱒に似て鱒よりも小にして味美し桜鱒と云
其赤章鱒より鮮く桜色乃如し故に名付く是も甚た用ゆ鯫是之
大石 棹 大和本草曰鱒又和名を鱒奈と云もの此根源向魚にて皇の流行説図字土
郡を流るる渡人此を以てまつ王武の流行大宰府より貢す今も筑前の千年
川に鱒多し千年川より大宰府に送る ○良安曰今東北国多有其
肉 温 味 美於鮭 ○大和本草曰今俗に鱒の字を用ゆ出处を知らず漢名未詳

琵琶湖諏訪湖箱根湖等に多し正月湖水より河流に上るを漁人多くとる名赤
し諏訪にては赤魚と云長六寸に至る味不美な由くさし河魚の最下品之或曰
中に不載石鯫魚なりとも云 ○良安曰鯎 出処未詳 俗云宇久比
小者名夜末女 江州湖中多有之状似鯇而腹赤背黒大者近尺
肉有細刺作鮓或炙食味淡甘不美豆州箱根豊後処々
有之 ○大石按に江州湖中にも多し桜の花咲時出るを見さくらうをと称し江
湖色の古人は只さくらと呼ぶ貴人数をくし四月の末頃なり文鱒は丹波の狭
の海にも多し[illegible]の湯より初て出る者は[illegible]て彩し丹後の古人は月の鱒を称して
桜うをと呼ぶ以て此を[illegible]や[illegible]に[illegible]る名を鱒の種類小なるとの之

○蝶鰈 ○時珍本草曰比目魚一名鰈比並之
也魚各一目相並而行也亦雅云東方有比目魚不比不
行其名曰鰈是也段氏北戸録謂之鰜呉都賦謂之魪上
林賦謂之鰨鱋猶屧也俗名鞋底魚鰈兼也魪相介也鰨相
貼也 按郭璞云所在水中有之状如牛脾及女人鞋底細

鰈紫白色兩片相合乃得行其合處羊邊辛而無鱗口近
腹下劉淵林以与王鰈魚益不然○順倭名云王鰈魚和名
加良衣俗云加禮比○時珍云王鰈魚按博物志云吳王
闔閭江行食魚膾棄其殘餘於水化与此魚故名或又作
鰨王及僧寶誌者益出傳會○又曰大者四五寸身圓如
筯潔白如銀無鱗若乙鰶之魚但自有兩黑點爾小者曝
乾以貨四方清明前有子食之甚美清明後子出而瘦
○和俗おもく重魚と加礼比と称乃如く和名抄に記されし特殊な形状を説よるく考ふた和尺
の差須方よ治之也鰈乃一種之祖王鰨魚の曝乾の説よ相似よ死行遠あよ可疑
賞与有之鰈乃一種之祖王鰨魚の曝乾の説よ相似よ死行遠あよ可疑
○和名抄云比目魚かくれつとと云を著してそれよ多くく鰈よ種々
常のみの一種い鞋底魚と為國ふくく平目と或ひ冊按の蒸鰈よ毒もく
ふ故中毒凡漁人有いをくく注好よ熟してよ海底よ多あり先

於ふ示ふくく帝を度の溫湿の
もの溫熱のまをふくて而味と失ふ今ふ於ふ或服毒を放毒人ふ害を
ふるまをふ小児等ふ食鞋底魚ふ水かせいとも云日新ふくく毒之ふをぬし
味ふ而ふ若ふ細目よ比目魚と一物と云ふ於ふくく多之國書よ鰈鮃魚形扁而
薄名鞋底魚左目明右目脉今國廣ふ以此魚名比目魚不知比目之一魚也と
云○唐安曰鰈於似鮸而扁頭小口尖黑紫有細鱗裏
白滑其兩眼相去甚近向上而相比故名比目魚乎然本
草別ふ雅云鰈一目而不行此不行故兩片相合乃得行之
說非也不知別一物有乎否大者二三尺其種類多其因
白柔美味厚蒸鰈出於若狹及越前大尺許者以塩水
蒸令半熟取出陰乾数日而炙食如有鱒気而亦味美
星鰈一名鰈一名鰈裏白皮有黒点者其大者尺余小者五六寸
石鰈表黒皮鰨兩辺有黒片石子者味勝大者一尺餘
瓶子鰈於閩大而背鰈中有凡文秋冬出於播列明石大

者尺半其味美与寂上　白水鮮（一名霜月鮮 又云藻鮮）仲冬多出
大者不過六七寸形狹小而因薄軟子赤雞滿腹味不佳
目板鮮表裏無鱗畧狹長　木葉鮮大一寸許作脯炙食
香美出於泉州異物志所謂箬葉魚者乃是歟○（丈不拠）
篤信の云かゝれ魚の列にや和名抄に加良衣比と云ふ鯛に似て小の
あかれも…アラエの…

○桜鯛（桜魚）

○神代巻曰赤女○私記曰赤目鯛（女イ）○一書曰或云赤鯛○順和名曰崔禹錫食経曰鯛（和名太比）味甘冷無毒貌似鯽魚紅鰭者也○八閩通志曰棘鬣似鯽魚其鬣如棘紅紫色○…鯛の流れ…文鯛の字も将…
…鯽魚或は赤…魚と鯛と…和…鯛と…
（名タイ チヌ）魚海鯽鯛と…類之…
…紅鰭赤鬣…桜鯛と称…
文木集…
…鯛…

○（太石）平魚（タイ）之延喜式出今堂上女房詞曰於比良○良安曰俗謂扁者称平（タイラト）
（神平 太比者平字ノ訓下略）本草綱目三才図會等不載之可知中華希有之物也近世浙江寧波海中有之蓋春夏唐船多来朝時鯛附船来矣秋冬秋冬飲帆時此地鯛附船多（比伊平又云志比良）渡唐焉

鯛形似鯽而扁其鱗鬣淡赤白離潮則変赤鬣特紅其肉白味美寂与本朝魚品之上四時共多諸國皆有種類亦多也大抵一二尺其小者一二寸名賀須吾鯛摂泉之内海所取者惣称前魚賞之播州明石浦之産亦佳也北國新潟辺之産有大者三四尺西海對馬辺之産形短而大也並味不如摂播之鯛也俗傳云西海鯛春夏越阿波鳴戸入播摂之地者大骨生瘤焉盡然乎否日本紀云産火之出見尊失兄鈎而後探赤女口而得之赤女者鯛也（一云鰡也）以赤女魚所以不備供御者此縁也蓋惟鯛自古供宗廟之祀薦至尊之膳又与嘉儀之餽贈則赤女

非鯛也　戎鯛狀似藻臥魚而頭大口肥尾小窄如鰹尾
鱗似鯛而深赤鰓下有黒雲文口小而露齒甚醜　黄穡
魚（出閩書俗云鼻折鯛）形色似鯛而色淺鼻直而如折故名鼻折鯛
味劣於真鯛　笛吹鯛狀似鯛而淡紅色口尖長似吹笛
者故名　烏頬魚（俗云須美夜木太比）形鱗共似古伊知魚而微帶
赤光類有黒紋如墨引大者七八寸肉白脆淡寸美夏秋
多出　海鯽（又曰尾魚和名久呂太比又曰知沼太比）狀似鯛而鱗色黒似鯽
故名海鯽和名曰黒鯛多出於泉州古者泉州称茅渟故
名之凡鯛夏月味劣此魚夏月味最勝其鱗鰭色如磨琢
鉄鉛其肉有微毒（尾長者名加伊豆毒走）　嶌鯛似海鯽而小不過
四五寸許有黒白橫紋相次重々不混雜　小瀧鯛鱗色
不紅潤而帶微黒形扁長而頭不凹眼色鮮明略類海鯽
肉柔味不佳此多出於総州小瀧故名又泉州淡州出之
名知鯛（未詳名義）　○大和本草曰鯛に雌雄あり雄ハ色淡黒背にかどあり雌ハ

色紅に形うるハしく味よし雄ハまされり延喜式に平魚と云もたゐの事也　鯛
鮮なるハ其味魚と云又棹尾と云或曰三車一覧に平魚と載たり赤鯛のほかに
青き鯛の類多し方頭魚閩書に出たる鯛と云東土にてハ奥津鯛と云
閩書に似棘鬣而形小頭方味美しといへり異のと俗魚とするし同じからず
又ハ鯛のごとくにして長し金絲魚黄なる筋あり是又方頭魚の類なり又鯛ハ
淡灰色味おとれり此亦ハ直寶鯛ある鯛より身広く味淡くしてよし又
淡白に紅尾にてあるも多し身ハ口中にかれたり口より尾まで筋ありて直に
切たるがごとし此鯛ハ黒き黒魚長一尺余或六寸許又同亦黒きもあり
鯛のごとし味亦鯛に似たり　（此下尾魚海鯽烏頰黄穡等良安説に出す略して不書）

○馬鮫魚（又名補）　○閩書南産志曰馬鮫魚青斑色無
鱗有齒（一名章鮌）小者曰青箭○大和本草曰魚大なるハ腹小にして狹し
故に狹腹と名づく東海西海にあり○良安曰馬駮魚頭尖眼大腮硬
無鱗青色背有斑円紋又無背文有之肚白鬐硬刺尾
有岐尾端有刺鬣如大鋸齒其大者三尺許春月盛出故

俗用鰆字形狹長故称狹腹狹腰乎其小者尺許色最青並肉白温脂多味厚美○太石案に古訓書に出されともいはすして争時なる春季より三月頃気温暖く快晴の日播摂及四国九州の諸海にては魚並に鰤幾千となく混して群游して海上に浮ふ其時漁人大網を張て鰆鰤を集む然れとも其一網をかきてあつむ漁人是を称して魚島と称せり是に至て春の海のなるれ多く群をなすもの故に魚島ともいひ味も至て拝用せす魚皆碎るゝ如く亦して網をかけ容易し是鮮游せる間従て二三日をすきてはるにたる愛散せりといふ太に聞く春魚ハ俗にさこしとよふ之文中鰆とよふものなかる鯖の様くたるものとよふ之又ハ人には及はぬ味のよきを勢州の海にあし鰆は諸海にありといへとも讃州より出るもの佳品として其味美他州のものに勝れる又鰆の子を乾して唐墨と称せり然る鯔の子と唐墨と称せる鰆の子ハ其価之味鯔の子に及はす鰆ハ春の季にて其中の味佳なる魚島の鰤ハ脂多くして其中に劣り毎鰤鮪とも春に拝用せる鰆ハ腹部味佳にして其中ハ脂多く佳なるを

○桜貝（さくらかひ）

○詩小雅曰成是貝錦○埤雅云錦文加貝謂之貝錦以其背用謂之貝貝背也○説文云貝錦貝也海介虫古者貨貝而寶亀周有泉至秦廢貝行錢○順和名曰尚書注曰貝本物也和名加比○大戴礼云甲虫三百六十四○和にてさくら貝数文称計まくら桜貝と称せり者一種にてさくらいさき桜色なる貝之けれ梅の花貝とさくら貝と称すと皆あつる花貝とのさくらハ桜の貝にはまて一説にはいはれとも一種に限らぬ色ある陽の光にすきての貝数数残すほとさまさま花貝桜貝といはれ成ふとよく半なしとは魚の未好まぬ

夫木集春　風ふけは花さく浪のをるたひにさくら貝よる三島江の浦　西行

○良安曰近頃官家競集諸蛤殻凡六百五十種而未尽或有名無蛤或有蛤未知名蓋如哥仙蛤源氏蛤者以和歌所称者凡二百余種以翫弄之如有珍品則出貴價得之

補　太石

○花

○説文曰花榮也本作華从艸䔢聲隷作華今通用○郭璞曰江東謂華与敷陸佃明曰古讀華如敷不獨江東也○鄭氏曰華之言蕐是假借也○薛麟詩云向陽花木易与春○鶴林玉露曰洛陽人以牡丹与花成都人以海棠与花尊重之故也○横川曰櫻之於我國也不曰櫻而曰花如洛之牡丹蜀之海棠蓋所以貴之也○大かたこれ説のごとく和俗の花と呼ぶ者は桜なり故に連歌などにも桜と云句ある時は花と付花を桜と存するにも無疑ある事也和歌には花と云は桜なるとも

やく知らしむ者なれとこれやの名も語にしるく中華にては錦の花を桜なく綵錦

或は論識のことく文海棠なりしと知らし近世来朝の僧か桜を海棠と称

し数中僧の説也は日本の桜は唐の海棠なりと思ひし狂識なるにや

△造花

●隋煬帝築西苑周二百里堂殿樓観悉極華麗宮樹秋冬凋零落則剪綵与花綴於枝條色淡

則最以新者常加陽春○帥門傘曰俗ノ花ヲ雑ノ枝加ヘ二句ヲ
新古今集　後令思說ノ古ヲ少ク
仍テ花ノ事ナリ

△翫花

○万葉集物名部詞書曰二条乃后ノ春文ヤスシ
不ノ下ヲ略ヨムヲ正ノ意サセリ○或物名ヲ
三種秘事ト云ヒ草ノ名ヲ隠ス事ヲ云ヘリ
之ヲ物ノ書井ニ物名ノ同著ト云ヘリ
作ノ意ヲ云ヘリ

著古ヲ云ヘリ○或物名ヲ
ノ下ヲ略ヨムヲ正ノ意サセリ○或物名ヲ
三種秘事ト云ヒ草ノ名ヲ隠ス事ヲ云ヘリ
之ヲ物ノ書井ニ物名ノ同著ト云ヘリ
作ノ意ヲ云ヘリ

△花鞠

○説文曰餅ハ麪ノ也或作ル餅ニ又汲ル水器ノ

唐杜甫詩云可是近來踈酒盞酒瓶今已作ル花瓶○鄉傘
曰花入花瓶ニ花ヲ挿ス器ヲ名ヅクル事ヲ用ル云ヘリ
後撰集　久ノ事アルヲ云ヘリ

△花帳

錦帳蒙被欄檻置惜花御史掌之號曰括香

○玉壁集曰唐穆宗每宮中花開以重

△花鈴

綺金鈴係花枏上以驚鳥鵲號護花鈴

○天宝遺事曰唐寧王春紐紅絲与縄

△花幕

於苑圃中隨行載以油幕或遇陰雨則以油幕覆之盡歓
而帰○十ヨリ下ヘ九數和朝ヨリ今古アル事ハ俗ヨリ云ヘリ即チ幕ノ類ナリ

○同曰長安貴時子弟春時遊宴供帳

○博異錄曰崔元微月夜見青衣女伴

日楊氏李氏陶氏又緋衣小女日石醋皆殊色芳香醋カ日苑中每被悪風相撓當来封家十八姨ノ相庇毎歳旦作一幡ノ上圖日月五星立苑東崖辰立幡東風刮地折木飛花而苑中花不動崖乃悟女侍衆花精封姨乃風神也

△探花使　○詩話曰進士杏花園初會日探花宴以少俊二人与探花使若使他人得名花二人被罰

△花乃宴　○国史曰嵯峨天皇弘仁三年二月幸神泉苑覧花樹命文人賦詩賜綿有差○李收延喜天暦ノ頃南殿の桜ノ宣旨ありて宴ノ詩ヲ作文ノ序ヲ清涼殿ノ御前ニテ読ミ奉ル事ノ如シ南殿の桜の宴せさせ給ふ事ハ此ノ例にて書ヨリ後ノ例ニ引ケリ

△花軍　○天賛儀車曰長安士女春時鬪花戴

挿以奇花多者与勝皆以千金市名花植於中庭以備春時之鬪

△花車　○閑元遺事楊国忠子弟春時移名花植木檻中下設輪脚ノ様ニ以ス綵繩所ニ至自號移春檻

△花乃都　○御拳曰花乃都ハ名所ノ名ニ似タリ新ラシキ花ヲ集メテ一花苑ヲ作ルヲ云ナルヘシ

勺作ルヲ新ラシキ花苑中花ヲ集メテ一苑ヲ作ルヲ云ナルヘシ

勺去之花乃都ト云ハ植ルヨリ二句去之ヲ指シテ云ナルヘシ

義孝花ヲ連歌ニ詠ル事ハ新ラシキ句ノ出来ヲ待ツ間ノ故ニ

後拾遺集　長雨ニ侘ル人ノ家ノ庭ノ花ノ多クノ人ノ折ルヘキ

△花宴　○御拳曰花乃宴花ノ宴ノ新花ノ宴ノ名ヲ別ニ不立ト云ヘリ

なゝハ桜ありニ花之宴之桜ありニ句去ヲ云ヘリ窓之　○私

云人ノ上トハ宴ハ楊貴妃ヲ海棠乃睡未足ト云ヲ如ク解語花ト云歟ヒ之

△花乃滝　○古今集　年ゆく花のかみとなる水に花乃滝と云之

古今集　物云花乃ゝ滝の水に花乃滝と云之

△花乃波　○連歌新式曰花の波水辺ニあらハ植物之波の花
雑之心花ニあれハ水辺之花の波ハ花乃ちるく吹るに従ひ波の花ハ波乃花ニ似たり之
十五番歌合　梢ニハ[illegible]ぬ花乃波[illegible]庭の春風　祥空
△花乃瀧　○同書曰花の瀧山類水辺ニハ花乃瀧の作
なり又花乃散る文字瀧之景乃中ニ庭の瀧[illegible]なし
新古今集　瀧津瀬ハ嵐乃庭ニ吉絶と云[illegible]花乃しら波　秦氏
十一番の句ハ山類水辺なりし又花乃瀧と落花乃作として限りなり
山桜咲きぬしらぬ思ひ雲ちに見る瀧津[illegible]
△花乃雪　亀山殿七百首　○同云花乃雪降物ニ嫌ハれ只ニ花の雪を云之
庭のまかりかさねて風さそふ梢ハまたき花乃ちる雪　為世
△花乃雲　○古今集序云春乃朝ハ吉野山の桜ハ人丸
心ニハ雲かとそ見へける　○人丸家集ニ文武天皇吉野小川[illegible]御
供ニて　志ら雲乃見への千種に[illegible]桜之[illegible]
業雅朝臣付人丸の所ニあしかりし[illegible]一条禅閣乃所ニ

人丸贊　わたつみの吉野の桜雲とみし庵は[illegible]あやなしやと
歌新式曰花乃雲降物あらハ[illegible]ハ植物
千首　[illegible]風の[illegible]花の為家　為尹　○連
△花乃山　○御傘曰花山名之[illegible]句作ニ[illegible]て為[illegible]
咲白[illegible]花ニあらハ同云花の[illegible]押出して花之花山ハ花山[illegible]
[illegible]花ニなり[illegible]ハ[illegible]名[illegible]ニあら[illegible]名[illegible]
花山院も名[illegible]之恩按唐乃花山ハ蓮花之花ニハも[illegible]山城宇治郡乃花山ハ[illegible]
花頂山ニ[illegible]花ハ句作[illegible]花なりし花山院の号ハ萩[illegible]の事之　○
古事談曰花山院ハ貞保式部卿宮家や貞信公[illegible]之坊花山院
御傳領之云々　○著聞集云[illegible]乃[illegible]の[illegible]瞿麦一説萩[illegible]
[illegible]ハ花の盛ニハ[illegible]桜[illegible]まて[illegible]ニ[illegible]て花山の号ハあり[illegible]
中ある[illegible]や　○拾芥抄曰近衛南東洞院東一町本名東一条　○[illegible]の
説[illegible]花[illegible]と[illegible]や[illegible]花の山ハ海[illegible]ハ

○八重桜
人のもて伝きぬと詠ぬるより伝桜とはいふ也
一重のもの九郎の八重桜の八重桜とよめるより
此桜もと八重桜とよびしをもてりみ今の
八重桜ハなかりの故也
福寺乃東口堂の前よりあり○さて一の統名八重
禅林寺殿 去の日よりもとて乃至にさり植すれ八重ともそ 唐氏
△桐の谷桜
桜ともよりも此花の桂桐の谷とよめるより
○俗よく薫賀の軍家の時桜を賞玩ありて杉谷
桜乃名よりて桜乃名を詠ぬ

△普賢象桜
堂天下第一之也世傳鐘
之普賢堂或曰普賢象和訓鼻
如菩薩所乗白象之鼻也雨説孰是
○飯若狭百首横川詩席曰普賢
倉有堂普賢安之其地有櫻俗謂
○砂石集云奥
○さて一の統名八重の名とそ八重ハ遅く咲
○俗よく薫賀の軍家の時桜を賞玩ありて杉谷
桜乃名よりて桜乃名を詠ぬ

出ぬ花の中より茎枝出蓋象の鼻の中より茎出ぬ花
しを茎として畫しと和訓通を彫ぬ名とぬ鼻
鐘倉より出ぬ名とぬ号横川の説のごくハ此花の形也
如菩薩所乗白象之鼻也雨説孰是此花伝のなり

△虎尾桜
○是も葉桜なり此樹の葉の形
花の蕊みしく枝上より葉として現ぬより虎の名ありしより

△極楽桜
○此花いろく數色あり其樹悉とて
葉まくそのなり統号て漢出して別通をりて極楽と名ぬより

△仔豚桜
○此花雛桜の種也ひろく遅く咲て花のありよ
ものしおりと尾張と訓通を尾張国よりよ仔豚桜と其花みの統
添之伝称ぬの歌よ仔豚桜ともありみ雛風の種ぬくして名
付ぬより又一統桜乃古種乃仔豚ぬて愛甘桜伝十六の種

乃花多くして実少なきも亦好もの

△江戸桜

○はなも遅く実おおく葉と共に出て黄ばみ
葉ちいさく厚く仮名文仮名などにも多く
清くうつくしき事さのみとふるにおよばず
きゆえ江戸桜と名付しや彼相の谷雲賢堂乃歌の形容にて

△楊貴妃桜

○はなの形大輪すこし少紅色と等う和俗の云
海棠乃花よりうつくしき事雅海棠乃格事のうつくしき名と成りしや宗長人
按ずるに昔興福寺の源宗と云僧此種を
○世に八重ありて色濃く上品也葉盛なり文名考

△泰山府君

○異名平家物語長門本 四方桜云
古き桜町の中納言の植ちらく桜もこれ
信西入道中納言成範卿を桜町とよび
又は勧門乃文入らの西本願寺桜町掛く垂桜を通名ら歌に異名よ

山町と桜町とをかりて又ひきくだりて
なの中納言ともよび又桜待乃中納言
雅しき事乃桜ありて小菊の異名を泰山府君と
定めし天照皇大神宮乃神名ならん
角下を
ちるや当あるべき神の沖ふかき

△九重桜

○歴代編年集成曰南殿桜樹在紫宸殿巽角
遷都之時所被植也而及兼和毎中枯失仍仁明天皇被
改植也今度焼失畢天徳三造内裏之時被移李部王重明親王
家櫻也件樹本吉野山櫻○
○大暦曰延文二年三月十
九日今日南殿渡栽櫻樹殊絶美花也号鎌倉櫻○続千
載集云南殿の桜をなを南まで極給ふ内の花の種ぞ給ふも

いにしへの雲為て桜経しあれ又春あひ代をもへ
続撰吟 雲のうへ九重の桜咲ぬれば春の日数も
いや増りけり

延喜治教
奥義抄

△渭桜 ○神代紀云雲珠桜ハ唐鞍乃雲珠ニ似たれハ称するの
縁ヲ之 ○一説云渭桜ト云ハ口桜之冠の錺ニ彷ひ玄のヲ之冠の渭と云ふ事へさもと之
夫木集 袁や此音ヲ写つ渭桜錺る乢ゝさりりなり絶し 寂蓮
志賀のハ渭桜ハ一種乃名ニハあら須其外の名也ハ 此木山 東山基 糸くくら
曲山桜 浅黄桜 乙毬桜 さまくの桜の称数之又桜の名木ハ
瀧桜 和列 左節 布引桜 同上 千本(チモト)の桜 同列 祇園 墨染桜 同 伏見 西行桜 此名ある 名不ニ
小弓く も見り さまくハ花乃名ニあらす木乃名之類桜乃異名多し一二を記せ
夢見草 蓋 其らしめし大安いろんな草花すりうへ母ニ万数之く雲
夢見草 曰 えゝ気く花とやらん夢見る阿そ草も志くねりなの命に
化名草 曰 あた名草いかなる人のうへ数々き世ニちりとみらん
志草 同 老くうのうちまとしもそハとされ草風情ちく八重ある遠し 後拾
此外古草 曙草 などしま 桜の異名 霧玉草ニ 又人丸桜 雲井桜なと木名之

○庭桜
櫻桃名 楔荊桃 多ニ陰 ○花彙篤云櫻桃一名朱櫻○爾雅曰
○陶氏本草曰櫻桃即今ノ朱櫻○頌

和名曰朱櫻和名波々加一云迩波佐久良○和俗此樹ヲ
生るゝ實ハさ庭梅と称ちり若朱桜之花白色あらてちいさき花あるを云しに
新撰六帖 あさくら おちこちなあらし桜庭のせはらいにしへのあやなん 衣笠内大臣
○補 太石 本綱曰山櫻桃樹如朱櫻但葉長尖不團子小而
尖如麥多毛生青熟黄赤亦不光沢而味辛悪不堪食○
大和本草曰山桜花もと実もゆすらに似く小さく尖あり葉ハゆすら小さく尖る
千葉なるゆきあり深紅色も千葉ハ実なし ○良安曰葉似櫻桃而薄
扁長尖不皺三月開花似小彩團花而小千辧五六分許
不結実亦花赤者有之○太石考するに書に朱桜と云ハ山桜を梅と云ふ之
和名抄に迩波佐久良と別すいふまや篤信良安ともに桜桃と云ふ但良安以下
草辨のちとはいえは巾もまさ一色のちハ
○樺さくら ○時珍本草曰樺木其木色黄有小斑
點紅色畫工以皮焼烟熏紙作古畫字故名檴俗省作樺
字也 多識篇曰加介波今云加波佐久良○大和本草ニ曰

かにはさくらハ一重桜なりし彼古紀にアリ或曰一重桜の深紅なりと云古今集にかにはも
さくらと云ハ先なり樺とかはさくらと訓ずハ雅く樺ハかにはる高木なる哉ちなみ郎
さくらハ甲列にあたりし皮ハ萬葉の炬なりし　○源氏物語曰ちりてもかはさくらの咲
出より白ひかりて　○かは桜とむさくらもあはれなるまたくも玉篇に樺ハ木皮の名とみゆ
和訓のかにはかはなと云と述之

新六　あさみとりのひかりの里ハさくらもとは知く都人すらし　右大臣入道光俊

○太桜

○太種乃樹稍桜にあたり咲も咲せ又一種ちいさき白花
開く花待遠にて賞せられさりし花咲きしもみても書に許用せず歌集并ニ書紀に倭名
紗名にある木の異称別種ともし桜とも名附し馬蓼康翟野跳且奴枯なとし云
也と或書に馬康野奴の字ヲ用ひ是と鄙むの語なりし

夫木集　山陰にたてる太桜ひともとあれはかくもとす　後嵯峨

○桜精

○奥儀抄曰拾遺集歌　ゆくへもしらぬハさきぬれ
なにかわれとしもむ乃うけに世あたり人はさくらのちると或人先達のさしいさと云ハあはれ　みよ
羽之あさりかりてあはれハちりをしくらめりとかせしいりと思はさくらの桜と見はなりける

なに仰ともしすともかりと云之見て世ハ意あるらすと思ひ又古今の新古今集生かの歌の
羽をさけりてまたいふなりあなかにはとのありけれ中に人々の何をと
春霞たなひく山のさくらはなと朝にすむ桜かりにやと人々のたはれ（拾遺）

△桜人

云々し　○連哥新式抄云桜人は花人などといふ見しほ　○栗原寺菓抄云桜人ハ花人なとと云よなし（三十七番歌）葉人を
訊字文哉なか不入ハさらひれに直すし　○一説桜と書く人とも云之
栗庵抄桜人と世の母ちしめたまふみとしたらかはなてなんとのや　下男

△桜戸

松乃戸さしとしし　○一説云戸乃通遠に桜の咲たりと云は桜のあはれなるの道之
　○歌林良材曰桜戸ハさくらの木にて作りたる戸（桜戸）
ミ川乃山桜戸とまれよ此あるにて見えしあさし跡を請之　家隆

△桜田

字抄、同つハ返事に（寄）桜田ハさくらとのもとし思ふ彼も山桜のあとといふなり
○連哥新式乃秘伝書云桜田ハ桂田之桜田ハ何にもまし
又云桜のおほくある所ほどにまよひ入る万葉集乃桜田ハ紀伊名所之八雲抄文佳
○私云然しても桜ハ一重ハ春分の後凡廿日のほと　開く八重ハ十日ほど遅し兼好乃花の盛

冬立春より七十五日と芸窓雑録に京乃ひと桜六十日余咲八重ハ七十五日と
山桜きハめて早き乃字溢逸走傳の為之古桜也乃桜多く洛東祇園清水乃邊
洛西嵐山吉野乃桜乃種子ゑと桜之小阪之ごとく山桜多し洛東祇園清水乃邊
李氏園院の花八重一重乃種類多し津国令観等に見桜と名る十餘様有
粤乃能因乃入相乃種よりも数多しと源氏物語に唐尾よ仰ぐより
河内国獅子窟観音八重桜多しは山林にひとりの
西行法師乃詠歌に嵐山西谷桜多しとそうは方角よ限りし
並木桜あるよしなり東山も桜多し蹴鞠乃
桜多し武城の壮観之信濃の浅間よ桜多し連翩
古語よ花と称乃名柔弱綿針作名附乃宜さもありつべし
古歌に花いろ〳〵よ古歌よ花と
ゑ歌とよびし伝乃風俗乃
如くも多くの花と記せしを考ふに作名時代乃
○桃乃花　○詩曰桃之夭夭灼灼其華注桃木
名華紅実可食○礼記月令曰仲春之月桃始華　開元
遺事云明皇御苑千葉桃帝折一枝插於妃子宝髻曰此
花亦能助嬌○時珍本草曰桃品甚多其花有紅紫白千
葉二色之殊○和名云桃子毛毛○和訓考解云ケの毛乃毛
實もく毛乃ごとし乃毛ハ毛ホ乃實乃名ごとし
或ハ実乃名有又事類相感乃至無功乃名を以名乃者ハ
仙経作名乃事ごとく簡当而如桃ともいふ海乃方之名乃ごとく
ありしく行路之ごとくの字を出さゞるとも
ハ和名ハ多く當紅濃紅
俗ハ云淨土桃〳〵紅白桃桃日月桃ハ
榮花と関者乃詠桂ハ云ハ〳〵嫩肌依先乃桃林今世の壮観之
萬十九　云乃苑乃助乃桃の花下照遠ハ出立嬋娟
○李乃花　○説文曰李果名从木子聲○詩曰
何彼襛矣華如桃李○承平舊簒曰蕭瑀陳叔達論李花
有九標謂杏雅細淡潔富宜月夜宜緑鬢宜泛酒無異色

○詩話云誠齋云退之有花不見桃唯見李之句因晩登碧落堂隔江桃皆晴而李獨明乃悟妻妙○時珍木草曰李綠葉白花樹能耐久○和產二月開東花者多而早結實者少而遲開故名李故字從木子○說文曰李果也从木可省聲○管子曰五沃之土宜木宜杏○時珍本草曰杏葉皆口而有尖二月開紅花亦有千葉者不結實○多識篇云俗云安卑寸○和俗唐桃の名を呼ぶあんずと轉ず

○杏の花

太補石 三才圖會曰杏東方歲星之精○畫譜曰杏根生宜淺以大石壓根則花盛果結宜近人家者盛也

○梨の花

錄曰洛陽梨花時人多賞樊川飲其下曰梨花洗粧○李白詩梨花白雪香○白樂天詩云玉容寂寞淚闌干梨花一枝春帶雨謂大真妃也○時珍本草曰梨樹高二三丈葉光厚有細齒二月開白花如雪六出亦已無瓦則結實必佳故古詩云上已有風梨有蟲中秋無月蚌無胎○和名抄曰梨子奈之○和名類聚抄云二月仲春之候百果皆發而梨花最早故多詠之○枕草子曰梨の花を近くて見るはいとにくし愛敬なき人の顔などのやうにて

秦集 山梨の花のさかりなるに

○海棠花

以海与名者悉從海上來唯紫錦也者謂之海棠餘悉棠梨花耳○李賀皇花木記云海棠有三種曰貼梗曰西府曰垂絲与罌西州盛稱故有西府名彭淵材五恨一謂海

棠為香昌州猬香 ○花木録曰唐相賈耽著百花譜以海
棠為花中神仙 ○唐楊妃傳曰明皇嘗召大真妃妃醉酒
新起帝曰此乃海棠睡未足耳 ○時珍本草曰海棠二月
開花五出初如臙脂點々然開則漸成纈暈落則有如宿
粧淡粉 ○和名抄にハ真乃海棠なしと云へり中華ニ真乃桜なきに同し
俗ニ海棠と稱するハ林檎の花にて樹に雌雄あり雌ハ花咲實の雄ハ花開
て實なし此皆大明海棠の説に似たり和ニおいて海棠と稱せし ○大石神大
和本草曰海棠二三月ニ花咲く實のちさき比林檎小さくて味も林檎の
ごとし可食へけれど遅く熟して去海棠ハ南京より来る山海棠ハ本邦にもとの
るはしらるを中華より来るハ南京と浙江の二種あり本草ノ海棠子とすけも
も遅し梨より味堅く檎も早く花も海棠ハ梨の類也 ○良安曰海棠花
垂於櫻艶美也今亦有二葉海棠者其木小而能開花白
色帯紅但黄花 本綱曰黄海棠花色黄云云 及垂絲海棠 古今医統曰垂絲海棠上品
未曾有也蓋中華則以海棠為花之第一詩人最賞之

然杜子美詩集無海棠詩者其母名海棠也貴州鎮遠府
之産美 棠梨俗云山海棠 ○説文曰牝曰杜牡曰棠 ○
本綱曰棠梨処々山林有之樹似梨而小葉似蒼朮葉亦
有團者三叉者葉辺皆有鋸歯色頗黲白二月開白花結
実如小楝子大霜後可食其樹接梨甚嘉有赤白二種赤
者杜也 味渋而酸 木理亦赤 白者棠也 味酸美 木理亦白 共ニ
葉嫩時蒸晒代茶味微苦 ○棠梨ハ諸ニ乎井棠と書て篤信説ハ
本朝ニ未たありしと云へり然とも形状ハりんかうなると記され良安ハ未詳棠ハ和名
かりなしと云へり大和本草ニかいどうの葉ハ肝木ニ似て実桜桃のことく色小と云へり花も白くとのこと 思して其等ニ和ハ海棠なき也
然とも公の是之又糸さくらと垂絲海棠と之と篤信ハ云り良安ハ垂絲海桃ハりんきに
なれしと云り猶可考

○林檎の花　○宋馬志開宝本草曰林檎樹似
柰二月開粉紅花子亦如柰而差□ ○和俗なべてと海棠と称せ
風物の形と人々さへかくやうに記たりし林檎の説をも果ヵ多を得るに六月熟す説

○太宰府天満宮 良安曰林檎花葉類海棠花蕊紅色開則白帯微紅似海棠花而小○秦少游詩云林檎熟後霜露清小園嘉客試新酲又云林檎已過櫻桃熟又云林檎正熟櫻桃小是也其実之形状未詳

○楸の花

作琴瑟葉類梧桐葉而薄小稍作三角尖又開白花○順和名曰楸漢語抄云○八雲抄云楸と書ひさぎと訓ふ○本草曰楸荒本草曰楸樹甚高大其木可作琴瑟之類○楸の字のあるを以て訓ひさぎとするなり

万十五 吉年咲之久木今開往余土武将隠見人名四二

楸の説七月部に委しく作者未詳

○小梅の花

日消梅其實小而熟最早○范至能梅譜曰消梅云梅志書云落下化為水故名之○大和本草曰消梅小梅の名なり

卯の梅より後まで咲く白き又八重も作る皆小梅なり梅の実を採て之を煎じ又塩梅とす

○大石梅ふくみ梅の花まつ咲と云ふ梅の類なり

月開花形似梅而小白色帯紅色蕊黄而甚繁艶美也花落葉生枝長似庭櫻葉結子小於櫻桃生青熟赤味酸可

○木筆乃花

木筆正二月開花落無子夏秋再著花○陳蔵器本草曰北人呼為木筆其花最早南人呼為迎春○時珍本草曰辛夷者其也其苞初生如筆頭重々有青黄茸毛順鋪長半分許及開則似蓮花而小如盞紫苞紅焔作蓮及蘭花香○

○格物論云辛夷一名侯桃一名

来木　うちつけにさくとはなしにこぶしの木心せよとや…　為家

○文石 補 大和本草曰こふしハ木の実ハ辛夷也桃の如し…本草俟桃の名あり…其実ハ苞の形に似て…桐の子のことし…

○良安曰

一種有白花千葉者婆娑如幣俗呼曰幣辛夷

莫少集　こひつれば…乃木の枝に…　仲胤僧都

○木蘭の花

○本草綱目曰木蘭枝葉俱踈其花内白外紫亦有四季開者深山生者尤大可以為舟按白樂天集曰木蓮生巴峽山谷間民呼与黄心樹大者高五六丈涉冬不凋身如青楊有白紋葉如桂而厚大無脊花如蓮花香色艶膩皆同独房蕊有異四月初開始二十日即謝不結実此説乃真木蘭也其花有紅黄白数色其木肌細而心黄梓人所重或曰其樹雖去皮亦不死 ○大石

補入 大和本草曰木蘭もハ園史遵生八牋本草…二種…

園俗もくれんと云も…白きを白木蓮と云…好き…唐…記…此不同…雜俎曰木蓮…紅辛夷…蓮…色相似…辛夷…咲て…二月に開く

○良安曰木蘭出於和州大峯者花如山茶花六月開者有紫白二種未見紅黄者也畫譜曰木蘭花未開者浣以糞水則花大而香其瓣択沈精潔拖麪油煎食

○石南の花

○宗奭本草曰石南其葉似枇杷葉之小者而背無毛光而不皺正二月間開花冬有二葉与花苞苞既開中有十五餘花大小如椿花甚細砕毎一苞約弾許大成一毬一花六葉一朶有七八毬淡白緑色葉末微淡赤色花既開蘂滿花但見蘂不見花花纔罷去年緑葉盡脱落漸生新葉 ○時珍本草曰生于石間向陽之処故名石南 ○和俗…と呼て…と称し又和名…此木…又…或…陳…乃…鬼と…

○神丈石　瑯琊代醉曰魏王花木狀曰石楠野生二月著花
實如燕子曲阜古城顏回墓上有石楠二株大三四十圍
土人云顏子手植之木○右和名未詳○良安曰石楠
紅色而葉似枇杷而厚大者
花和刈葛城紀刈高野及深山谷中有之京師近処亦稀
有之東北刈絶無之性惡寒濕也三四月開花淡紅色秋
結細子紅色春鳥葉未落新葉生交代也竊考此非眞石
南花蘘荷所謂藥荊也子
乾亦及冬經冬不死葉互有細黒点此与倭石楠花○以
半石南と二本と云ふ事あり
○良安曰扉木山中多今人家庭
園植之樹葉形似橘梅而有臭香相傳曰陰夜挿之門扉
能辟疫気故名扉木矣四月開小白花結実四五顆攅生
青色稍熟如丹色似水木犀子而大

○蘘荷乃花
細碎共成一塊花罷葉出光緊微凹○三才圖會曰紫荊花
春秋運斗樞曰玉衡星散与荊爾雅翼云凡木心四荊心
方其花碎而繁色淺紫一種白荊出呉興玉虛洞後花白
似雪邑人爭賞之○和名未詳
汲古本作蘘荷之誤
紫荊花如小紫色蝶形又草中生花亦似之
良安曰紫荊樹皮濃白色葉微圓光沢似菝葜葉而薄長
三月有花淡紫蔂攅生大可麥粒連繁其実結莢似紫藤
莢而小中有細子春種子生植干庭蒔之俗呼曰蘘荷木
非眞蘘荷葉実大異蘘荷
多有胶如蔴其葉而無澁抽條長丈餘羅生叢名曰紫絲
黄子青熟黒其木蠹汁染絲名其木蠹之蠹云
紫荊者滝木也未見大木記
所圖与倭曰蘘荷者不遠滝木心之

○木瓜乃花

花深紅色○時珍本草曰按爾雅云楙木瓜郭璞注云木實如小瓜酢而可食則木瓜之名取此義也或云味酢得木之正気故名亦通○順和名曰木瓜和名毛介○和訓義解云とけ又びけ俱よりくるの物酒ど○和名抄云唐木瓜三月花初開紅色開地錦ト云其外淫木瓜花如亦赤色之良安曰世称木瓜者不合本草注乃是木桃而非眞木瓜也葉花植庭前乃曼眞木瓜也葉花近頃有唐木瓜者人愛其花植庭前乃曼眞木瓜也葉花実皆如所謂千本草惟不見其大木者疑往昔本朝唯有木桃而無木瓜子（木桃又名和木瓜小者如拳）樹似海棠而叢生有刺葉亦似海棠而厚末四三月開花紅色相傳此花毒気能害佛供故晷常不賞之寒檀子（おか木瓜田子俗曰小木瓜）其樹葉皆相似而春冬二開其花深紅色雜厚不見樹大者一種有花白者名雪中珍出於子種以供栽盆山野一名木瓜實物

○張華博物志曰地黄虚多生楊梅下時珍本草曰楊梅其樹葉如龍眼及紫瑞香冬月不凋二月開花結実賛寧物類相感志云楊梅樹生瘕以甘草針釘之則益皆物理之妙也○順和名曰楊梅和名夜末毛々

枕草紙曰くに裏のき事のさまでしきもの文字は字ばかりくきたなくしきもの楊梅ノ木ノ実ノ○和訓栞按ずるに前後の文を考ふるに楊梅ノ木ノ実ノ

○胡桃の葉

初生葉長四五寸微似大青葉而兩相對開花如栗花○枕草子文字はかりくきたなくしきもの云胡桃ノ○或云々ノ実ノ実之中ノ殻余渠ノ如くなるを疑結て堅硬ノ物ノ如くなるを疑結て堅硬ノ物ノ如くなるを疑結て堅硬ノ物ノ如くなるや

○櫟乃花

志云其葉如椿○時珍曰段式西陽雜俎云波樹長大餘皮青白色葉似槐而長花似橘而大○宗奭曰莽草諸

○藏器本草曰蜜香一名木蜜異物

家皆謂之草而本草君草屬今世所用皆木葉如石楠葉
枝梗乾則繩揉之有臭如椒○順和名曰唐韻云檓漢語抄云
似香木也○又曰山海經云莽草和名本草云木実可以毒魚
者也○和訓考辨云此木実毒あり含くくを殺すあしき実の之黒之
莽草和名多識編云莽草和名之駿河有之一名奈倍和里○大和本草云莽草名もまきに
似て葉厚く光沢ありて冬青からず春新葉を出すとき旧葉皆落つ
本草毒魚の部に載たり○和名抄引本草一名に順和名抄に莽草を木部に載て
和名もまちがへり○宗奭が説は全くりはの樹葉と掩
ひ久く掩置ときは葉を落すなり○楊慎が説は全く誤なり○
云莽草名作檓と名とさば莽草の其名也之久しと君小憲渡南
万 千 陽岑之仮実我家乃名之其名也 大原真人今城 考
新云 あかねさすきみの意乃等多佛のあと之と約や爺之 編云 春家
○本補 石本細曰木密此亦泥香之類也樹長丈餘皮青白
色葉似椵而長花似橘花而大子色黒如山茱萸酸甜可
食気味温○良安曰檓音蜜唐韻曰香木也按和名美之武蔵伊豆淡
路丹波播广多有之葉似冬青而淺青色此与本草所謂
木密葉似槐而長沢泥香葉似冬青者有椒気六月開細白花結
実青白色如天蓼子熟則裂破有中子五六顆大如豆而
潤滑味辛人食之多食醉恐可有小毒山雀喜食之呼枝
葉称花採皮及葉乾末焚香名此抹香浮屠一日不可欠
之木草辟臭気去邪鬼尸注悪気之功宜哉 莽草本綱
曰木若石楠而葉稀無花実採之其臭如椒搗以和陳粟
米粉細水中臭吞則死浮出人食之無妨又山人以毒鼠
周礼薙氏掌除蟲物以莽草莽草俗又有檓者非也檓有花実是亦入水中臭死故相
誤乎○大石曰篤信と莽草と檓とて二物とひとしく毒ある実の物なるを既よあきの
和名あるを之檓に和訓あるを莽草と檓とて二物とひとしく毒ある実の物なるを既よあきの
よりて鈎吻也毒列をもて之物列をもて之あるを山茶なり仰ぐら

仙夫ナド紙文ありて月少ゐと云く秋ごろ
ごろ毒あり誤て鼈（誤也）と唐古腫れ爛るゝ
毒多部よりごろ鉤吻ごろ多いごろの
ち毒ありとぞく書ゐの神僊よ伏兎と
て仍りかと實ゐの實ゐ毒ゐて

○馬酔木乃花

ありひらあせを也ゐ ○仙覚抄云吉川の河
昔築成のうひわりうん 辨よさ
ゐそさうて君うりて井のいとゐのゐ
詞ゐあるごとくありひと云本ゐれゐ
酔木馬食ゐ葉別死故馬酔木葉ゐ忌
冬の葉よ仰ぐ又きこの葉ゐ仰ぐ
きく下ゐさるゐ黄色と等溺毒
木枝ゐ葉と云 ○和云所伝皆悟ゐ
あせごと濃く馬の毒ゐ事と云万葉ゐ馬酔木枝ゐ
ありひと和云ゐ也書ゐ考ゐ卅ゐ
わく海ゐやあせごの枝ゐ折ゐくゐありともるゐや
南にもかひ いのゐいのゐ

万二十 伊気美豆尓影副見而開仁保布山齋の花乎神介古伎礼奈

堵に品着一枚つゐ子ゐ田横那ゐのゐ

○良安曰馬酔木（俗曰阿世保）生山谷高者二三丈小者一二
尺昏枝葉茂盛其葉狭長微鋸歯浅緑色硬而攅生於枝
梢九十月出花芽春開小白花作房結子亦作房一子中
細子多人家庭砌植之以賞四時不凋相傳馬食此葉則
酔故名

○躑躅

○千金翼方曰羊食此花躑躅而斃死故云仆一説云
羊性至孝見此花赤蒼思母乳躑躅折膝飲之故云仆○
時珍曰山躑躅高者四五尺低者一二尺春生苗葉浅緑

○万葉集二十 曰山齋花（つゝじ）○尼安云
山齋ゐ事ゐさゐゐ事ゐ之 古
集ゐ七冬ゐ歌ゐありゐ
ゐ

○陀羅尼集経曰迦羅毗羅樹唐云躑

色枝少而花繁一枝數蕚二月始開花如羊躑躅而蒂如石榴花有紅者紫者五出者千葉者小兒食其花味酸無毒一名紅躑躅一名映山紅一名山石榴一名杜鵑花其黄色者即有毒羊即躑躅也○多識篇曰山躑躅今按都之○罗山文集曰道春與朝鮮進士朴安朝螺山筆語馬喫躑躅花則中毒安期云未曾見喫躑躅而病着又同躑躅花着杜鵑花也期云杜鵑与躑躅不同躑躅有毒杜鵑花則食喫不妨○太和本草曰躑躅大小霧露甚外種類多一例按別品小多一如色紫作小注河洛小山躑躅之載于凡躑躅等杜鵑花葉多毒物羊躑躅の附錄〇今葉よ万葉の石管自白管自茵花と書三ツ之別を備茵ハ茵艹と草よ俗る和名おすかたくしと云ふ者乱又馬酔木ととけしともあせみをと別をく俗おのくいあせをとし用多也也る馬酔木ふるくなまを始めて和書少なりて八雲御抄并庭訓往来部と陸奥部と順和名ふ部よりつぎつぎ

和名ハ本に載せ好者ハ中華ふ花ハ万葉集八　山毛世尓咲有馬酔木乃不悪君乎何将徃而早指見

月九　細比礼乃鷺坂山乃白管自吾尓尼保波牟妹尓示

作者未詳

作者未詳

△羊躑躅

葉花黄似瓜花三月四月采葉似紅花莖高三四尺夏開花似凌霄花山石榴正黄色羊食之則死○古今注曰羊躑躅花黄羊食之則死見之則踟躕躑躅分散名羊躑躅○時珍曰似桃葉者最的々真花五出蕊雄昏黄気味皆悪○和俗の解ハ云毛知豆ゝ之○和名抄曰羊躑躅和名以波豆ゝ之一解乃名也一好淺紫色の名俗よ薗ふ植ふるしと云ふ毒ある名也万葉集を引めて古今注ふ名ふ誤ふ又遠に解ハしと云ふ

万　才二　水鳥乃発乃浦廻乃石上自木五開道子又将見鴨　姓未詳

末　春五　いろくらいそもよりひろや　後頼

○良安曰羊躑躅和名ツヽジ一曰毛知豆々之按本草之諸説則今云蓮花躑躅也丹波及和州吉野山多有之其木二三尺高者五六尺葉似楊梅葉而薄有微白毛三月開花五出似凌霄花一莖八九蕚表望之如蓮花故名之又有赤蓮花者嶺南有深紅色羊躑躅者是矣凡躑躅多黄花者惟蓮花躑躅其躑躅之二種也而赤躑躅岩躑躅等亦一類而花色不黄其一種深山岩石間有之三四月開花似美容柑花而黄色其葉四時不凋端冬夏似豆空葵故名之躑躅葉淺緑色有細毛枚少花繁三四月開花淺紅似桃花色而一枚數蕚其花及蕚鮮于即黏如躑躅故名之花形色不美今人四月八日灌佛用之一種名江戸万葉者似躑躅其花千葉而色濃不黏為異一種岩躑躅葉共小花色深赤名琉球平戸一名琉桜平戸九州之地名本出於琉球四月開花單瓣白寂易繁茂其大者至一二丈一種有朝鮮躑躅高五六尺葉似橿葉三四月開花大如平戸躑躅而淡紅白色潤沢寂寥珍重永来部躑躅出薩广之南嶋者永来部地名彼土甚暖故如雖移種于畿内怕寒難茂盛其花赤大徑五六寸許甚奇凡躑躅類敢多不下三百種不能悉記之

△山石榴

○紅色如錦繡燄或云此種不入藥○時珍曰深紅色者即山石榴名紅躑躅一名無毒二月始開花如石榴花○順和名曰兼名苑曰山榴和名比々之伊波豆豆之即山石榴也○今按紀氏載山石榴之名而為落葉灌木則紀氏所謂山石榴者非今之石榴也又有一種山榴艶似火欲花人採尋来把寒食家應插門戸以禳毒氣云

○太補石 草木盆譜曰映山紅生滿山頂其年豐稔人競之
○良安曰本綱山石榴花映山紅一以厚一物今
別為二種凡一種葉類桃及柳葉映山紅葉畧帶田形
杜鵑花葉形比映山紅狹長三種大異也○映山紅花類
杜鵑花而小深赤色草葉三月開花能映滿山故名之有
大小二種小映山紅開花寂繁蔽枝條堪愛今又有白花
者有草葉八葉千葉之數品大抵二三尺高着一二丈以
為珍蓬广日向山谷多有之移種于諸國彼地有霧嶋嶽
每嶺燒起旦此花映山故名之朝鮮載晉山世稿云大明
年中當本朝後土御門時得日本躑躅數盆及其花開葉草而花瓣重
大色類石榴重疊蓼久而不衰其與我國色紫而千葉
者妍嵐不啻若嫫母與西施也上嘉賞之命下上林園分
植外人祕莫能得後一以種盆一以種地以試之種地者
凍死而盆者至數年之間枝條方盛 按是杜鵑花或類也

△茵芋 ○蘡薁曰茵芋蘡薁月春生苗高三四尺莖高三
四尺莖赤葉似石榴而短厚又似石南葉四月開細白花
五月結実○順和名曰茵芋和名仁豆々之ニ辛云
茵花香居 ○同物而作二名者多也 ○和訓義解云
篇曰茵蘡仝波豆志 ○和訓義解云婦人の乳頭を仰り給るの畧ヽりの二字若つゝ通をしひて又ハに通ニ云ふ
共よつて通をひ又ハに通ニ云ふ而好よろこぶる通ニ
非ず名本草にハ和の一毒草ニ入れよ入れよ
順和名本の説に入り事依あるべし紹巴のいはく式ニも非草木之ニ茵芋
を云ニ云ニ平原にまじる蘡薁の説向花と云不當し向花も此種ニ
万六 上ニ裏 龍田道之岳邊乃路介毋管方乃 高橋虫麻呂
同五 細比礼乃鷺坂山乃白管自吾介尼保波氏妹介示 作者未詳

○太補石 良安曰茵芋和名有躑躅之号非今躑躅類中無
結実者

○沉丁花 瑞香花同

○格物論曰瑞香樹高三四尺枝幹婆娑葉深緑色有楊梅葉者有枇杷葉者有桐葉者有毬子者有纍子花紫如丁香唯纍子者香烈枇杷者能結子宋朝始著名始出於廬山○山谷水仙詩曰含香體素欲傾城山礬是弟梅是兄○時珍曰山礬一名瑞香枝幹婆娑柔條厚葉四時不凋冬春之交開花成簇長三四分如丁香狀有黃白紫三色○多識篇曰山礬 今案利无知也宇計 ○大和本草曰本草芳草門に瑞香を和にて云沉丁花と同し本草木と草類小の也草と木類小載る由を灌木類の山礬花は相似て不同○私云瑞香の説格物論に在せり○秋神石 五雜組曰相傳廬山一比丘晝寢山石下聞異香覺而尋之得此花故名睡香後好事者以為祥瑞改為瑞香○古今醫統曰用浣衣灰汁浣瑞香根去蚯蚓以漆查壅根擣雞糞水澆之皆盛長此花惡濕畏日不可露根○良安曰瑞香人家多栽之疑此山礬之類又此云沉丁花也春插之能活一二尺亦開花高者四五尺枝幹婆娑葉似無盡梔子葉及楊梅葉春著花形如丁香而紫既開則四出外淡紫內白十余朶攢簇其香烈如沉香丁香相兼故俗曰沉丁花然濕濃不如蘭花之艷未見黃花者未審 ○按るに瑞香は本草芳草類に載られとも灌木也又山礬を沉丁花の類とす盡譜また細小にして秘密く見へ鬚ありて香き事良は俗に七里香と名くと云ふま山礬は梔子葉に似て齒あり株のまゝ丈許二月開花六出しして白の如し綵する椒の如き蕊又熟されも黃にして今花も七葉と成く黃に染む又若の中子熟へ入又蕊と成て灰にやまて紫を染れとも黝しみの礬を備へとして純染る山礬とふとの蓋沉丁花も葉は叢にし花を出して澄めも紫子と結ひとも同類ともかとも亦わ蓋沉丁花は瑞香にして皆形ふ多く之山礬は和に未見之

○鈴掛の花 ○大和本草曰鈴掛 和品 小木叢生也春時終時開白花蕣房酴醾に似たり又小手鞠とも云 下毛の都やさのさと云々京吉一稟より叢生ス葉は柳葉に似て鋸齒あり其花開く ○私云不

為房而色甚く節間まあり山伏の袈裟に似るより俗袈裟ゆすりと云く終掛
ゝ稀しき名の名ゝ故に掛ゝ山伏の道具の名ゝ又は花園とて終の如き名之ゆや

○異名 神農本草経 良安曰鈴掛草引蔓其葉似櫻而圓小夏秋葉間著花紫色而圓器似千日紅之花○しほのごとく蔓のもの
いまだ多くや非ず ○良安曰小粉團谷名小花 木高四五尺葉狹長似棣棠花蕊其花形似粉團花而小白其大サ不過於寸半許

○加木

○俱青作叢赤莖又似藤葛高三五尺工有黒刺葉生五枚作簇○時珍本草曰此藥以五葉者良故名五加譙周巴蜀異物志名文章草有贊云文章作洒能成其味以全買草不言其貴是矣春月千舊枝上抽條葉山人採与蔬茹○和產兒云乃赤しと云ふ俗よりも蕃蘿と云ふ春月まだ生ひ嫩葉摘く茶とするの比なり其實の時を待て用茶の數に加へし

○

神農本草経 良安曰五加楠枝能活其根考藥者阿波丹波之產良金剛山者次之

○枸杞

詩中有三杞將中子樹杞棚柳也集干苞杞隰有杞楸北山言采其杞○華谷嚴氏曰木也集干苞杞隰有杞楸北山言采其杞枸杞也○本草曰枸杞春名青精子夏名枸杞葉秋名却老子冬名地骨根○禹頌圖経曰春生苗葉如石榴葉而軟薄堪食俗呼与胡荽其莖幹高三五尺作叢六七月生小紅紫花隨便結紅實形微長如棗核其根名地骨○時珍本草曰枸杞子樹名此物棘如枸之刺莖如杞之條故兼名之道書言千載枸杞其形如犬故得枸名○續仙傳曰朱孺子幼事道士王元正居大若巖一日汲于溪見二花犬逐之入枸杞叢下掘之根形如二犬烹而食之覺身輕飛于峯上○

和產兒云乃赤しと云ふ俗よりも蕃蘿と云ふ春月まだ生ひ嫩葉摘く茶とするの比なり其實の時を待て用茶の數に加へし

と常く延びたりし林道春口杉風道人との飯を割れまうさを作りと見ゆ和俗文
書月採く蔬菜とあれ相云蔬菜れ數ハ花果にかくもうなりかハ其葉く食ふもの
とりく季する採用せり種んと分属し ○ たれ也ふ田傳須二種あり
用へしるも枸杞な味厚し葉まて用ゆなを作飲代茶にあり ○ 神大良安
曰枸杞苟起二音倍云久古豫列今治之産良阿列次之又曰一種
蔓枸杞似蔓而枝韌垂如倭連翹様其子多而大美

○

新桒摘

○ 先代舊事紀十六曰養桒之法冬月
雪前以馬糞入桑根春月雪後以馬尿洒桑本栄桑在濃
養粮濃而桑篤桑篤而蠶勢一々而蘭太 ○ 詩曰蠶月條
桑注蠶月治蠶之月條桑枝落之采其葉也 ○ 時珍本艸
曰叒音若東方自然神木之名其字象形桑乃蚕所食葉
之神木故加木于叒下而別之典術云桑乃箕星之精桑
有數種白桑葉大如掌而厚雞桑葉花而薄子桑先椹而
後葉山桑葉尖而長 ○ 楊泉蚕賦曰爰求柔桑切若細縷
起止得時燥湿是候 ○ 清輔奥儀抄云にわかきまゆのふにも桒ハ初し
うくとのふそあまふ神くもりてを葉まくひらこのまゆあうれいもかくたときき
とのかくあれともおもく繊を絹もあれしたと煮かれもしときめ引きしく續
万葉の歌注之 ○ 和訓義解云くハのくハを食ひて蚕之蚕のもふ桑の木なれ
もくいて ○ 和名も説の如く桑子の教経あり其中白桒の雞蚕子ふ
柏すらし書神代の葉を新く細米して何なし之新桑とハ書萌をいふなり
なる蚕の又桑子の名有るなり

万葉
都久波祢乃新桒眉乃衣者雖有君御衣曾安也介伎保田思毋 作者未詳

新六桒
里人のはまともくみふ桒子や藤のまとうなる夜木立八 衍家

○ 神大 古今医統曰白桑葉大而無子蚕食之繭厚絲堅而
倍常取枝可壓熟地 ○ 良安曰桒粮蚕之地皆多栽之有
不実者俗謂之男桒

○

茶摘

○ 蘋頌圖經曰茶春中始生嫩葉蒸焙

去苦水未之乃可飲也郭璞曰早采与茶晩采与荼茗蜀人
謂之苦荼陸羽茶経曰其名有五一茶二檟三蔎四茗五
荈茶者南方嘉木也如瓜蘆葉如巵子花如白薔薇寒如
栟櫚○時珍本草曰茶清明前采者上穀雨前者次之此
後皆老茗爾采蒸搗焙修造皆有法茶之税始于唐徃宗
盛于宋元及于我朝夫茶一木爾下与民生日用之資上
与朝廷賦税之助其利博哉○毛文錫茶譜云蒙山有五
頂上有茶園其中頂日上清峯當以春分之先後多雲人
力候雷發聲俯手采擇三日而止其四頂茶園采摘不廢
惟中峯人跡不到矣迎歲稍貴此品○順和名曰茶名私云無訓
龍巖集云梅尾自古産佳茶而未知有名其山及廃清拙和尚集中同夢牕
國師遊梅尾之詩始識古呼為茶山其詩曰幾重峰轉又
谿廻行到茶山瞑眼閒清拙○西齋詩話云壽工人梅尾山茶見恵賦詩謝其略云幸得
梅山

信初嘗日本茶○日本記曰茵蔯茗老葉名也順和名出之
海人藻茶曰茶者自上古在我朝晩茶節會之設因裏被行公事儀式
而葉上僧正入宋之時重被渡茶種梅尾明恵上人獲之○大和本草曰茶の
中華よりわたる事中古よりの事にて久と順和名抄茶茗を載たり順村上帝の時
人也藤原敦光茶の讃朝野群載に載たり敦光は白河院の時の人也茶の種子
残日本紀に始て何の時か分明ならず葉上僧正宋西禅僧重て種をわたせしより
好茶の種となりて栄西建保茶養生録を作り茶の功をすゝむ或説に延喜
四年撰山城国風土記に栂尾の茶を賞し吃茶の事を載たり栄西は岩上茶と云上茶
是也と云栂尾小植しむ鳥鼠同穴集小後鳥羽院の御宇の恵上人宋の茶
を栂尾に植たるより始て一就宇治の茶将軍足利義満公の時宇治の茶
もてはやされ栂尾茶は次に下れり今は日本小昔は賤民も黒茶を用
ひて茶は稀なる中華又同之近代は茶は諸国の産多くして宇治
栂尾を称賞す○私云当世流行の産多くして宇治
栂尾を称賞す
抑くは二月節と云ふ説と十二月節と云ふ説と有二月節と云ふ説は宇治の名物と云
抑くは二月一日二日之間其節の遅速その年の寒暖による二月中旬

後八葉第之爾雅云苦荼一名茶又本草曰采蒸搾焙の法皆春也以外漉造之茶茶の試みとは茶部の後あれば云々毛吹草曰茗茶茶同名

延喜の諸書に新茶と書に載り惣而茶部に在之

聊爾代醉曰蜀雅別蒙頂山有火前茶謂禁火以前採者

後者曰火後茶○五雜組曰一(巻十)古人造茶多舂令細末而蒸之唐詩家僅隔竹敲茶烟是也至宋始用碾搾而焙之則自本朝(明世)始也但採者恐不若細末之耐藏耳○錦繡万花谷曰九紅無茶字但有茶字耳(轉音逢安曰漢時茶字也加艸)○東國通鑑曰新羅國遣大廉如唐得茶子來王余植智異山○良安曰是乃朝鮮國種茶始(唐文宗大和二年倭人入唐得茶種歟)本朝嵯峨天皇弘仁元年(朝鮮宣天長五年)茶儀式始(先十年於朝鮮許其後明恵上人入唐得茶種歟)種於栂尾山(初昔)凡種茶性畏日畏春霜故自節分後四十八日至八十八夜用芦簾覆其樹而自穀雨後三四日摘新芽修治之其法和漢異(和則蒸熟以漢則焙熟)細篭蒸之用(山茶樹或蕎麦葛也)盛縕囊絞去汁(薫之色好美也)晒乾以焙之(蒸焙不可成アリ)以椎雉羽擇之也精工者焉濃茶(昔今昔中膚)数品盛袋藏壷以敢工者献御用次進公(又有極品別択取葉不結茎之)候士家其次為詰茶其極上(曽々利)名曰揉(ヒキ)縮者一種有鮮青色者名青不佳為淡茶凡(建久中華元年)煎茶城州栂尾駿州安倍郡足久保村之産為上日向丹波薗茶亦可江州政所和州下市豫州不動坊並不劣其他諸國皆有之凡本朝山家上民毎旦煎茶入塩称朝茶多飲之而無病長壽人多矣益又于本草之説与馴不馴之異歟但池湫病忌之夜多飲茶則令人不寝耳

○ 冬法

灰白色似皂莢葉而圍又似槻葉亦圍四五葉損生一處葉甚稠密味若採嫩葉煙熟水淘洗淨油鹽調食亦可蒸晒乾做茶煮飲○大和本草云山茶料和名ふくとうと云ふ多生飢民取葉蒸之又貧民竊特之夢々飯土に蔓々食之味美○（藻塩草云今俗ふくとうと云ふ）

新撰云帳 いはゆる木の茸と云のたぐひ

○補 良安曰山茶科 倍 云料蒲是子生山野中丹波多有之高五七尺木皮灰白色葉理其葉似茶及櫻嫩葉而柔有細鋸齒五七葉攅生枝岑秋如草辦菊花樣二三月小白花開於葉間不結實四月採其材似欅等板侮欅○又曰波太豆毛利其材似欅○大石板

○ 山吹

蘆生延蔓春深與薔薇同開一名地棠花又云御帶花○順和名曰本草云歎冬一名虎鬚和名夜末不々木万葉集云山吹花已夜末布木○万葉集云山振○塵添埃嚢抄云水法高僧傳云鷲峯山尒春生黃花と聞く草ありちきりの招引有妻子同蔓之春を花山吹よ相當る花

○下学集曰醾醾日本所謂山吹是也俗呼歎冬謂山吹者誤也然清愼公詩云歎冬誤綻暮春風公之作亦誤歟○多識篇曰歎冬在陸地曰也未布攴又一種花似醾醾者亦曰也未布攴是同和名而異物也古人於万葉中多詠其花因假其字而書之耳非以似醾醾者与歎冬也後人不辨之公任朗詠載歎冬是已誤矣況其餘歌乎○大和本草曰棣棠園史及允旅門花譜ゟ其形狀詳也然ゟあきら山吹ゟの遷生八枝ゟと載ゟり又草の者と金梔喜水ゟ渓谷と好ゟ又白色あり葉もゟ小ゟ者ゟて実ゟ

大臣の考ふ一年焼物うつきこそ木よ騒さたる山吹ふ一枝きこそ木の梅い小さ栄の
大きまく咲きともくくきるうてた人作し井ものの
の盛あ人の焼のとと薬師しさんうふ
集曰玄衣のあ作ふ若大和の男井ものの女と
多統と男の公誠よ望ってゐる春山吹のまくる
春い若玉茅
薬師寺僧元
弘安 仲よ 玄のおりけるのゆえ
曰かくる 仲とうひよかあし統の名ゆ
万十 花咲而實者不成登毛長尓所思鴨山振之華 作者未詳
巻百首 歌介の字誤あるんとこあり
こうきのさあやはちふ咲物
○太神良安曰棟常花其葉似櫻桃葉而長尖四月開花千
瓣深黄單葉者花大其色艶如山吹之黄金故名又有單
葉白花者不美歌冬即山蕗也 ○秉燭洞曰朝鮮李奎報集
詳見稲若水本中附翼
よ點燈もと云ふの代よも統の風流ゐ

○早蕨
初生無葉時可食 ○爾雅翼曰野人今歳焚山則冬歳蕨
茶繁生其葉未抽時掏其根可粉 ○時珍本草曰爾雅云
蕨蘆也茶名陸佃埤雅云蕨初生無葉狀如雀足之拳又
如人足蹶故謂之蕨齊魯曰蘆初生亦類蘆脚故也二三
月生芽拳曲狀如小兒奉長則展開如鳳尾高三四尺其
莖嫩時采取以灰湯煮去涎滑晒乾作蔬其根紫色皮內
有白粉擣爛再三洗澄取粉作粔籹 ○和名抄曰薇蕨和名
和良比 ○和漢故のさ一さるひのさ皐又小の毎統之粔籹俗よ蕨餅
と訓せ如名よ無茶ふ多
新六健蕨 多の日多くの猛蕨あけと又東んお百首ふ京 如泉
泉山根多 ○根多おく山落のるさや京つくきかさしあん
拾百茶番 むくさらの磨おりくしまる形をはあまる蕨あけうて版季
万八 石激亜見之上乃左和尻姚乃毛要出春介皮介來鴨 志貴皇子

○狗脊

蕨拳曲繁盛故有月爾之名○崔禹食経曰紫者曰蕙（音朝）○藾頌曰紆曰狗脊苗尖細碎青色高一尺以來其莖細而葉花共兩々對生正似大葉蕨比賈魚葉有歯面背皆光其根黒色長三四寸多攺似狗之脊骨大有兩指許肉青緑色一云無花但有二種○時珍本草曰蕨一種紫茸似蕨有花而味苦謂之迷蕨初生亦可食又曰拳曲繁盛一種根有金黄毛如狗形○多識篇曰紫茸今案波奈和良比○大和本草曰是茸也まことあり味苦し狗脊に別あり中夏ら多是○或説に狗脊ハ俗よみせんまよあり是物之名紆曰紫蕨又蕨ともを遂ちよ孚めしと和産生ま茸ともを毛状とも云ふ孔名ありと云ふ

○補遺　○貞安曰狗脊生深山中春月生芽如蕨而一莖無枇莖末発葉似握拳形而小嫩莖刈取晒乾用時漆漬水一宿去苦味再煮食之治耳脆美也羽列秋田同寂上之産佳既長則葉有鋸歯似貫衆而厚面背光兩々對生附葉生細小花老則莖褐色如漆塗筋而長三四尺其根多毛但全毛狗形者希矣○一種有大葉者倍呼曰鬼狗脊嫩芽亦不堪食○大石兼忠曰其茸生拳の如き形よ綿茸のごとく厚く帽子をつくるとの経ら分く帽子とつくるとも義修よせまいのらふと云ふ茸よの説手はよそ化ともあり

○茅花

蒹草名○藾頌曰紆曰四月秀蕚（注）不榮而実曰秀実曰穎生穎有芒如針亦可啜○時珍本草曰白茅春生茅布地如針俗謂之茅茸の後如俗のつまる○和訓栞曰茅花成穂○孔子不修るの業とらと別もちのもの

万八　茅花抜洗茅之原乃都保須美礼今盛有吾戀苦波

新古　なの一の芝まよつまるぬきさまるもつむぬくてぬくまる

文永　春面の多地のちりくる

大伴田村家毛大嬢
なの花
四カ月

○虎杖　○爾雅云蓫虎杖郭璞注曰似荭草而
粗大有細刺○藾頌曰紅曰虎杖三月生苗莖如竹筍狀
上有赤斑點初生便分枝子葉曰如枣葉七月開花九月
結実○時珍本草曰杖言其莖虎言其斑○清才納言の拾遺
曰いぶりは箔て虎の杖と書ともあり○和名抄
曰あらハばきを虎杖と揃ともくくまれる所ハ
葉も細朱もくく僅ときせ云くくまれる所ハ一茎の頂葉ふ
なりてきよ云くくまれる所ハ葉のうらおもてもくくまれ
きよ云ふの虎杖ふよや葉のうらおもてもくくまれ
さいき書と云　八雲御抄曰さいき書云云葉のうらおもてもくくまれ
冬枯れともと名抄ぬさいき書ともあり
○和名抄曰ともと云ひ本草に生庭畔ともと多とるいとう
いとうともと云　○補良安曰虎杖根出金剛山肴良小児折
其莖剥去皮噉之味酸故名酸杖大根高者不過三四尺

然松前之虎杖高丈餘而如木歟冬亦有大餘而宗奭疑以為非蓋隨土産有不同豈惟虎杖耶又
日本紀曰仁正帝生多遲花落有千井中因為御名號多遲此瑞兆別天皇多
遲比花者今虎杖花也

○荁　○藾恭本草曰董茱野生非人所種葉
似蕺菜花紫色○三才圖曰胡荁草枝葉似小荁茱花
紫色似翹軽花一枚七葉花出兩三莖○順和名曰荁茱
和名美礼須　○順和名の形象ふ黄ふ云ふ如ふ
草乃叶ふく為乃郎と捨ひをと神ふ入多祇と引掛ひ
捨ひる郎ふ家ふあふ前生乃まと叶ふ
乃ふく云ふ葉ふ云ふ
天智天皇
近衛異名

高

○神代良安曰菫字未詳本作董黄土乃黏者今人謂从菫水中泥黏者為菫音謹又木菫日作槿蓋从土會黏土字義又謂鳥頭苗為菫草謹音又木菫日作槿蓋鳥頭苗槿共有黏汁也然嶺蔡所言者即須美礼也田野小草也葉似蕺菜及旋花葉而小其襠有略缺三四月抽莖梢開小紫色其蔓曲垂作鉤小児戯採二莁鉤于鉤對引則以蔓切落方俗名角力草結子内有細子其子綻脱殻三開李時珍曰菫有旱菫名又似柳葉小者亦有其莖不出凡小児取菫鬪戯者牴牛児菫刀草之三種就中菫之名

○藤

曰藤皮着樹従心重々有皮四月生紫花可愛長安人亦種節庭江東呼為招豆藤其子成角角中仁熬香煮酒不敗敗酒中用之亦正其花桜辟拭酒醋白腐壊○

唐漆挨裏物名苗尾治咽喉用郡乃郡乃国造川瀬乃連と云者乃由より一夜小藤生ら悩く恐く苦ら乃名乃尾別記ふ由乃事と藤衝く事を苦乃名乃赤くしくあを海に草よ絵かく○保氏おぼ云山藤乃立却ておく復○

○宋開宝本草曰紫藤○陳蔵器本草

咲乃名乃あやしくみら却ておく復○

○ある説ら云東京課令老子しく云

多乃由藤艶なるにしく後小杜流乃流字捺庭ら移さ有しよ頭三乃(ら)花と開

ないうる故ふやと云事と不思議ふ思ひ

ひさや螺乃浦ら藤浪乃郡の杜よりふきしく

のまるまうて勅して被加久さ加しとも○恵夢の類と藤と称ふ之

なまふと夢ふ郡ふ入ふれと云藤のあし誰得ふ

万三　藤波之花者盛尓氏来辛城京子御念八君　防人司大伴四綱

子載　いつしかもふりひさけん春の雨を　家持

春雨　孝謙

同原　むらさきの　松のえのみとる尓とせしを　かりてもかへらぬ物あるを

同　松の人　そもやなおあの雪も春もなを咲りけり

柔

○補　良安尺楠藤花於水寂鳥蓉灌河於其本葦則亜時不」洞又藤樹冬月酒糟汁及米泔汁灌」根則茂盛○太乙云一種白花あるとのよし猶しらず異名ありや未考

○桜麻　之

○倭名抄云麻乃花いぬき中ふすこしすくなきある麻なりと桜麻と桜麻之　○蘂塩云麻乃花小文字をそへるごとくなるを麻とよめらん桜之是ことと布ま績麻とよめる○或説云麻乃花小夏咲のなれ神事抔乃説そあるようきや只裏作抔の説も葉よりは花二月より生ずる

嫩葉乃桜麻をそよごとなすし苦参乃説信用し難し

万十　桜麻乃苧原之下草露有者今明而射去毋者雖知　作者未詳

○毋子草

草二月始生莖葉白脆三月三日婦女汞之蒸搗以与餻傳与歳事○荊楚歳時記曰三月三日取鼠麹汁合蜜和粉名龍舌糕音食之厭時気○時珍本草曰鼠麹草麹言其花黄如麹色鼠耳又有白毛蒙茸似之故北人呼与茸毋原野間甚多二月生苗莖葉柔軟長許白茸如鼠耳之毛細小黄花成穂結細子○卲桂子甕支語云北方寒食采茸毋草和粉食宋徽宗詩茸毋初生認禁煙者是也紀本草○李時珍本草曰鼠麹草俗名毋子

ものの名ともよみ侍れど上巳の言侍ず又毋の字を用ゆるあり

○神良安曰和名抄以菴蘆子訓泥乎古者非也今悪疾

咳ノ人採其花代烟草蓋本於三
毎用二久於炉中焼之以筒徐々
吸レ烟噴下ス有レ涎吐去名ニ三奇散
○通草乃花　○薇頌曰紅曰通草藤生蔓大サ如
指一枝五葉頗類石葦二葉相對夏秋間紫花亦有白花
者○順和名曰通通草和名阿介良○大和本草云通草一名木通也
莖葉と通草とし云ふ毒敷馬乃木芽漬ふ通草や葉ハ五葉十分数ニ月紫
花と開く花容ニつ丹分数秋園子試煮ふ此草山野林中にて多し通草ハ花ハ八月始て咲

○桜草　七重花　九輪草　○大和本草曰櫻草和品三月紫花を開く桜花小
似ゟ又白色淡紅色黄色あり高き事一尺餘ふ莖ニ葉ハ蘿蔔ふ似
て小ゟ花如ニ銭大ニ畏寒暑又九輪草十七重草あり此類也好ニ陰地ヲ
○私云謝書ふ桜草の如ふ七重花九輪ふ云ニ種と也ゟ名一種ニ名也
ニ物莖葉花各一也其葩の形色似桜花故桜ふと云ふ又葉ハ一莖ニ也
莖に花を開く重ニ也故ふ七重花九輪ふの名ありと二種ニ云ふ非ニ考○

補大救荒本草曰山蒿苣生山野間苗葉搦地生葉似蒿苣
葉而小莖脚花叉頗少葉頭微尖邊有細鋸齒葉間攪莖
間淡黄花菌葉味微苦○食安桉此云山蒿苣九輪草ヲ
似蒿苣葉而扁邊有細鋸齒而葉脚窄葉心莖淡紫三四
月抽莖開小花似櫻草花而異大生於莖周八梗各一様
如車輪至梢如此七層或九層宛然似浮屠九輪故名有
紅白紫三種結子茶褐色其葉心莖中有紫色強糸凡畝
狀乃九輪草也唯山蒿苣花色黄也九輪草未有黄色者
以茅異　櫻草生山谷中即九輪草之一類異種也葉畝
相似微小邊齒尖刻不甚光沢而葉心白九輪草葉心紫三四月
抽莖頂生花似九輪草花而單淡紫色或白色又如櫻花
寂艶美故名櫻草結蒴兒青色内結子初青後茶褐色人
家移種之○大石曰は名水草ゟ有ゟ水の清ゟ所ニ生ふ又水中ゟ梗ゟ
高サ尺余ニ團ゟ梗ゟ末ニ數ゟ花ヲ攢ふ

○眉仿玄

二月生苗二三寸時併根作菜茹食甚美四月高尺餘多剌心中出花頭如紅盖花而青紫色北人呼為千針草大薊苗根与此相似但肥大爾雅○宗奭曰大薊高三四尺葉皺小薊高一尺許葉不皺○時珍曰大薊々猶髻其花如髻也一說曰大薊葉上有白班点故有虎薊猫薊之名小薊亞於大薊葉上有白班点異阿伎○多識萹曰小薊於仏名為虎薊之訛也俗呼為名之異耳

薊花蒼紫色人家種之今有正白正紅正紫者或白而末紅或紅而白皆以為珍人所愛也其異品出於子種盖野生之者春月採之煮熟而拌糖堪餌焉右一神○太石曰今本草以為一名大薊者誤也和名當々木と云るもの歟薊の根多肉而白汁黐人の眉作る者是也

原野濕地多有之花淺紫色似薊而瘦葉亦色淡不繁莖無刺称女阿左美又以薊名鬼阿左美又一種有菊薊者莖葉似苦苣而莖有白汁至秋高三四尺開黄花似八重小菊而美故名菊薊

○金盞花

金盞其花形也長春言耐久也夏月結実在萼內宛如尺蠖虫数枚蟠屈之狀○周憲王(救荒本草同之)曰金盞兒花苗高四五寸葉似初生萵苣葉厚而狹抱莖而生莖柔脆莖頭開花大如指頭金黄色狀如盞子四時不絶○和名は従来少と違ふ一種名異あり長春と種名異同決記又金銭なと俗ふ中華又金錢の名あり

○神良安曰近時出白花者美珍○太石曰和名未詳

○馬蘭

月開紫碧花五月結実作角子如麻大而赤色有稜根細

○蕪頌曰紅曰馬蘭葉似薤而長厚三

長、通黄色人取以為刷○時珍曰一名蟲実叢生一本二三十莖苗高三四尺○多識篇曰蟲実今按俗称ヲミナヘシ本朝式ニ作女郎花ト○松下云順和名多識篇加木豆波太ト和名多波今按ニ馬刺牟ト云ヒテ多ク根ヲ持ク刷毛ト名ケ妻ノ条況和名ニ多久今世掃板ノ黒刷毛ヲ馬蓮ト云ヒ考良安曰馬蘭音吝俗云波礼牟葉長一二尺似薤水仙及蘭葉而甚劲硬三四月開花淡紫色六瓣三大三小可愛

○神

○えひ苅

似初出椄心又似車前草莖似葱白青紫色高五六寸上有黒皮裂莖似椄皮有花肉紅色根似馬腸四五寸許黄白色

○大和本草曰えひ苅和品花黄白褐色数枝ありのやうに小生房ニ月開花を蔡蘆と云人あり非○私云本草綱目三才図会等ニ解文を多ク写信ニ和品とも

蔡蘆の形と苓根黄白ニて多く微雷萄色に似たり故名之

○神

良安曰蔡蘆今多植庭園愛其花放妝全如上説本草

而根少異耳性宜陰所冬亦不凋葉似車前草而厚長布地生三四月抽莖開花肉紅色或淡黄或栢色或外褐内白或外紫内黄白或栢色或外青内白者名吾須手或淡紫者名出舩根四似鳥苽而中根多如髭故名蝦根恐此蔡蘆也然自古以万年青為和蔡蘆甚非也○東雅曰えひ苅琉球呉中国湧と云ふ未詳ニ○本草綱目曰蔡蘆二月生苗葉青と同ふ葉蔥のやうにくゐて短細莖と抽く黄色簇生を近ころ琉球呉中国湧と云ふ未詳ニ

ありと云ふ又白葉のものありと按ニ数説ありと雖多ク俗名根しるし俗名多きゆへなるべし

妻俗名の義ようて名付るなるし俗名多きゆへなるべし

○春菊

○時珍本草曰茼蒿八九月下種冬春采食肥莖花葉微似白蒿其味辛甘作蒿気四月起薹高二尺餘開深黄色花妝如單辮菊花一花結子近百成穂最易繁茂○花和名云春菊ニ同之或ニ菊菜共可茹

六月菊といへる一名野春菊葉似藁蒿茎高一二尺花形如茼蒿淡碧色三
月ニ開く是を騾菊と云説あり篤信ハ六月菊ハ馬蘭の類也と云 ○大石按ずるに
此説騾菊と騾菊混合して多くは見えし夫菊甲らハ菊ハ二物あり
先なる藤菊ハ葉ハ蓬菊に似て少し厚く柔かにして淡緑色也菊のかたち
さへやさしく淡黄之色のかゝ淡黄白なるもありて葉ハ藤菊ニ似て甚し軟
弱と云へく夫もあり又夫菊ハ葉藁蒿に似て厚く勁く淡緑色なる
花ハあり茎も藁蒿に似て淡黒色也野菊に似て鮮なる花を淡碧白
色なるありつし舊陽根より夫苗を生じて四月頃花あり実なし

○金鳳花

○時珍本艸曰毛茛音良俗名毛堇似
水堇而有毛也山人截瘧采葉挼貼寸口一夜作泡如火
燎故呼為天灸自灸春生苗高者尺余一枝三葉葉有三
尖及細缺四五月開小黄花五出甚光艶結実状如欲綻
青桂実而有尖 ○大和本草毛茛ハ葉に毛ありて花黄にして何首
の葉に似たり天灸と云ふもの鬼と云ふ法本郡に草和して一説に云毛茛

葉黄白二種あり白きを銀鳳花と云ひ一種二葉の花を金鳳花と云ふ
○按ずるに毛茛と金鳳花とは異なるものにや多く識者は毛茛と多加良志と
和名を釈せり

○良安曰毛茛形状如上説本艸今千葉花亦
有花罷刈茎枝則更生苗一茎一葉無枝梗並毛畧似小
欵冬而冬亦不枯至春別抽茎枝葉形変生毛黷青色不
似石竜芮光沢 石竜芮 和名不加豆美 俗云田芥子 本綱曰生近水
下湿地高者尺許其根如薺二月生苗叢生圓茎分枝一
枝三葉々青而光滑有三尖多細缺四五月開細黄花結
小実大如豆状如初生桑椹青緑色搓散則子甚細如葶
藶子 水生葉光末圓者石竜芮也 陸生葉毛末鋭者毛茛也 良安按石竜芮葉如人
参葉而花実与毛茛同截瘧挼葉貼寸口一夜作泡与功亦毛
茛 本草綱目云並不毒者是不並毒 ○大石曰右二種同類にして石竜芮ハたくりしと云毛
茛ハ鬼たびらこと云ふものゝ此も又同し二種ともに夫実り用ひし石竜芮ハ本邦の俗
云のありしところ所々に黄花ありて野原に多く生ずる物也

○華鬘
可介栽梅雨時亦可扦插活葉似牡丹三月發花淡紫色連開千朶○初春有糸而伏地者似佛桑而華縵故名之○
補良安曰華曼草高尺余葉似牡丹小而厚深綠色作房○葉之糸有竜苒者似竜鬚之細而柔弱作盆翫之
淡紅色作房○葉之糸有竜苒者似竜鬚之細而柔弱作盆翫之

○丁子草
花似丁子形淡葱色四月中開
良安曰丁子草高尺余葉似柳葉中空莖微迫
月葉周著花層々其形如丁子而紫色結莢大可一枡二莢向上如角
和名抄曰丁子草 俗通春の季の花之○補 私云古歌にも詠り 俗通春の季の花之○補 私云古歌にも詠り

○仙蓼萩
項草○漢書曰大宛馬嗜苜蓿張騫持千金請宛馬采苜蓿歸種漢武帝之離宮別館○李白詩曰天馬常嘶苜蓿花○時珍本草曰郭璞作牧宿謂其宿根自生可飼牧牛馬也又羅願爾雅翼作木粟其米可炊飯也葛洪西京雑記曰樂遊苑多苜蓿風雅翼作木粟其米可炊飯也葛洪西京雑記曰樂遊苑多苜蓿風在其間常蕭々然日照其花有光采故名懐風又名光風茂陵人謂之連枝草金光明経謂之塞鼻力迦二月生苗一科数十莖莖頗似灰藋一枝三葉葉似決明葉而小如指頂綠色碧艶入夏及秋開細黄花結小莢口扁旋轉有刺数莢累々老則黒色内有一米如稀米可舂飯亦可醸酒○大和本草曰苜蓿殻ものゝ仏墓萩もわ花と葉と萩に似て歟又大豆の花よりも嫩き時可茹 私云如意の名 結実の名梢之

○芫(レケンシ)乃花

○薏頌曰薏旧経曰芫草春生苗葉小而

尖似楊柳枝葉二月開紫花頗似紫荊而作穗又似藤苍而細○韓保昇曰芜葉生花落○時珍曰俗人因其気悪呼為臭牡丹山海経云首山其草多芜也容齋隨筆云蕳幹不純是木小人争斸者取葉桜樣皮膚軟作赤膚如被傷以証人○多識篇曰芜花今案美乙利○和名抄痛なしと云本草荊楚の条と云ふ葉花並似藤而小三月開花紫色或白色乃如有紫藤白藤然未見黄者本草曰絳列一種谷藤蔓生葉似小梅葉而扁三月葉間開花似紫藤花

○醡醪

寒食用醡醪酒○增韻曰醡醪重釀酒一曰麥酒不去滓而飲又花名○格物論曰醡醪花藤身青蔓多刺每一節着三葉品字青斑紅蕚及開変白其香微而清盤曲高架

一種黄似酒故加酉字○歐陽景詩曰清明時節散天香輕染鵝児一抹黄最是風流堪賞處美人取作素羅裳○東坡詩云醡醪不争春寂寞閒軟晩○三才圖會曰醡醪一種色黄似酒○大和本草曰醡醪外品多有之葉小草小而ちごに似く蔓ありて莖多刺莖方也三月末花如菊而小菊の字の意なるべし後今ことごとく牡丹なりと云ふ誤なり

菊棘と云又洛陽名園記に黄色の醡醪と醡醪醁と云日本の山ゐしと云酒の如し○和名抄云羅山の詩集に有と賦をくる数多とあり兼葭水陸混傳名と云々是なり

○菊栽種菊苗

○補良安曰其花白草瓣狀似花石榴之花

○菊志曰仲春取老根浄去宿土雨過一介之土不宜肥肥則癡頭仍以篩霞句絓日色凌晨澆水謂之分秋○玉函方曰三月上寅日采苗名曰玉英○時珍本草曰甘菊始生山野今則人皆栽植之○花ホの赤

法のごとく二月子苗そろひ伸ん菊苗となりたる
統曰種菊有六要第一向陽燥(サハ)護(マモ)氷雪冬養(ヤシナ)其根(ネ)春苗乃茁(ヒラク)
二(ニ)高(タカ)其畦(ウネ)寛(ヒロ)其溝(ミゾ)歳(トシ)加(クハ)新土(ツチ)去(サル)舊土(ツチ)三(サン)治(ヲサム)其苗(ナヘ)用
小竹扞(ツキ)立(タテ)其傍(カタハラ)以(モテ)草(ワラ)寛(ユル)縛之(シバル)其莖不曲(マガラ)四(ヨツ)培(ツチカフ)乾土(ツチ)於(ニ)久雨(アメ)
防(フセ)燻(ケブリ)其根(ネ)去(サル)削(ケヅル)傍枝(エダ)以(モテ)楯(タテ)正幹(ミキ)朝(アサ)灌(ソヽグ)清水(シミヅ)汰(ヒタス)其根(ネ)而後
用(モチヒ)棗(ナツメ)洗(アラヒ)培(ツチカフ)以厚(アツク)本(モト)又黄白(キシロ)二菊各去(サル)其半(ナカバ)糅(マゼ)而合(アハス)之則花
黄白相半(マジハル)○晝(ヒル)矯曰倍(マス)云二月十二日百花生日之候分(ワカツ)
種(タネ)以肥土(ツチ)壅(ウヘ)之令枝(エダ)梗(カラ)壮茂(サカン)花朵(ハナ)乃大(オヽキ)○良安曰春分種(タネ)
時去舊根(ネ)可栽(ウヘ)嫩根(ネ)如留旧根則生菊虎(トラ)而蝕(クヒ)葉(ハ)圃中菊
皆敗(ヤブル)凡菊子極細(コマカ)或(アルヒ)不(ズ)見(アラハ)故古者介(ハサム)根(ネ)掬(ムスブ)園近(チカク)自覚(オボユ)仲
春蒔(マク)花(ハナ)雖(イヘドモ)而生(ハユ)出(イヅ)数多(オホシ)珍(メヅラシ)花(ハナ)

○なのこ

葉青白似(ニ)胡荽(コエンドロ)白(シロ)華(ハナ)細(コマカ)蔓(ハヒ)叢生(ムラガリオフ)四月中生(ハユ)子(ミ)正(マサ)如(ゴト)婦人耳(ミヽ)
○薇頌曰紅(クレナヰ)曰菓耳陸氏詩疏云其(ソノ)
瑞(ミヅ)詩経云(イフ)采(トル)耳(ミヽ)浸(ヒタス)生(ハユ)如(ゴト)鼠耳(ミヽ)叢生(ムラガリオフ)如(ゴト)盤(ワダカマル)今之所(トコロ)有皆類(タグヒ)之
但不作蔓生(ハヒオフ)○藾恭曰菓耳(ミヽ)莖葉除諸毒(ドク)螫(サス)順和名曰(イフ)
菓耳菓音子和名奈毛美(ナヽモミ)○時珍曰(イフ)藾(ヒルガヘシ)韻書(ショ)楚人呼(ヨブ)豬(ブタ)与(ト)猯(タヌキ)呼草之気(ケ)
味辛毒与(ト)葵(アフヒ)此(コレ)草気臭(クサ)如(ゴト)豬(ブタ)而味葵螫(サス)故謂(イヒ)之猯葵(アフヒ)○藾
頌曰猯葵春生(ハユ)苗葉似(ニ)荠(ナヅナ)而狭長之粗莖高二三尺秋
有花(ハナ)如菊結実(ミ)○(つまびらかならざる)

○荒蒿

蒿従(ニ)风潜聲(コヱ)也有(ル)来謂之(コレヲ)蒿(ヨモギ)江南人呼(ヨブ)蒿与(ト)茨(イバラ)以(モテ)其根(ネ)

○時珍本草曰按許氏説文曰蒿本作

文結也蔣草義未詳○蕸頌曰蒿根生水中葉如蒲葦葦
刈以秣馬甚肥春末生白茅如筍即蒿菜也生熟皆可啖
餅美其中心如小兒臂者名蒿手（手亦作首）示雅云虫隧蓬蒿
註云生蒿草中狀似土蘭江東人啖之餅滑即此也○順
和名曰蒿首（和名古布毛豆呂乃）○私云和漢共ある物なれ共和名の
首ある物を以て此首者とも又作ものを以て此名ありしは如何女の髪に又秀穎（穎）之
義ありしにや

○蕸荷竹

唐氏以嘉草除蠱毒宗懍謂嘉草即蕸荷也又曰荊蕸江
湖間多種之亦北地有春初生葉似耳（蕸）焦（蕉）○時珍曰別
錄菜部蕸荷謂根也草部蕸草謂葉也○私云書月初生の葉を
蕸荷竹と名其根中の白きを茗荷の子と称し極生元食元食ふ物なり
茗荷の名称より賦を以て二季共に夏と云一考（蕸荷の訛か）
六月 部修之

○三月大根

有之形細長味鬆脆名曰楊花蘆菔（大和本草曰今按楊花蘆菔）三月大根と称する者なるべし

○江陰縣志曰蘆菔一種暮春時

△三月菜

三月小薹初花時采其葉白脆菜（ラフナ）葉の色深青而しく有光
遲速気味与他菜甚異（大和本草曰晩菜終る味勝れども久く有らず）

○松屋筆記曰菘（ハクサイ）者和名抄に不載

○三葉芹

如苦薪而大葉似罌粟而軟有光香味亦似苦薪（大和本草曰野罌粟春宿根生莖
曰稲若水野罌粟を以て三葉芹と記せり）

○補大農政全書曰生荒野中就地叢生苗高五寸許葉似
葛（勿子）秋葉而厚大又似地（牡丹）葉味辣採嫩葉煠熟（水）
浸油鹽調食○良安曰野罌粟農政全書所圖之畫則此

云三葉芹也二月隰地生苗一本叢生莖稍附三葉面背潤青色似芳蒿葉而微團大而一莖三葉有細刻蔕其莖淺青色或帶淡紫亦有之春取莖葉漂醬鹽調食脆美微有松気亦類芹故名三葉芹四五月老則起莖成枝開碎白花似芹及蓎蘿花子似小茴香而小根亦似芹而堅硬不可食是与芹同類異種也老者生白毛而頗似毛萇毛萇即毛芹也其花以黄与異今人多賞之故云不如正二月之風味佳者

十月採出於宿根者敗之然